



ふおーらむ

第10号



図書館サポートフォーラム

目 次

第 15 回「図書館サポートフォーラム賞」授賞式……………	2
-------------------------------	---

挨拶：山崎久道 氏

表彰講評：水谷長志 氏

授賞のことば

佐野三樹雄 氏

谷合佳代子 氏

山内 明子「俳句八句」……………	10
------------------	----

恵光院 白「切っ先のするどい図書館へ ―現下の、要・収集資料群、活用され、生き残るための図書館の未来へ」……………	11
---	----

岡田 恵子「ボヘミア、癒しの大地」……………	18
------------------------	----

今 まど子「土足はだめよ」……………	20
--------------------	----

しゃれ神戸「H E S O」……………	22
---------------------	----

末吉 哲郎「川柳にチャレンジ」……………	25
----------------------	----

平井 紀子「非常勤講師」……………	27
-------------------	----

水谷 長志「関根正二と生田長江《女の顔》（神奈川近美蔵）をめぐって ―美術・演劇・文芸をつなぐMLA」……………	30
---	----

安井 清子「ラオス 山からだより」……………	34
（第2回 LSF 賞受賞、ラオス山の子ども文庫基金「ラオス山からだより」19号より転載）	

編集後記

第15回 図書館サポーターフォーラム賞授賞式

於／2013年4月22日(月)

喜山倶楽部 光琳の間(日本教育会館内9階)

1. 挨拶

山崎久道氏

(図書館サポーターフォーラム代表幹事)

代表幹事の山崎でございます。本日はおめでとうございます。

今回第15回を迎えることになりました図書館サポーターフォーラム賞は本日ここにいらつしゃいます初代代表幹事である末吉哲郎さんが発案し、図書館サポーターフォーラムの歴代役員の方々が心血を注いで支えてこられた、大変伝統のある賞と申し上げてよろしいかと思えます。

この賞についてはまだあまりご存知ない方も今日の授賞式にはいらつしゃるかもしれません。この表彰事業には大まかに分けて三つの柱がございます。

1番目は図書館の活動というのは世の中に知られにくいものですが、知らない所で非常に研

鑽を積み上げてきて、後世によく評価されるような活動があります。図書館というものが資料を蓄積して、今だけではなく50年後、100年後の読者に対してサービスするような機関ですから、我々は同時代人として、そういった活動をいち早く発掘し、評価していくことができないものかということが柱となっています。

2番目は社会的に非常に意義のある図書館活動に對してです。これは図書館というものがどちらかというと地味な存在でして、日本ではあまり社会的に十分理解されてこなかった経緯がありますので、こういった素晴らしい図書館があり社会に貢献しているのだということを、知らしめていくことができないかということが柱となっています。

3番目は図書館の活動はいうまでもなく日本一国だけで成り立つものではなく、様々な国際的な図書館協力活動をなされてきた方がいらつしゃいます。そういった国際的な図書館協力活

動をされたり、広めていった方にも顕彰したいというのが柱となっています。

こういった専門性、社会性、国際性といった3つの領域に渡って、毎年選考作業を行ってきているわけがあります。

今年はお二方、一つは個人ではなく団体ですが、どちらも組織を代表して受賞された、お一人の業績ではなく何人かの仲間と活動を行ってこられたという点では共通している部分があるかと思えます。そういう意味で図書館の今後のモデル、もっと言えば他の図書館員の励みとなるような賞をお送りしたいということで、今回の表彰対象とさせていただきます。

表彰内容についてはこの後表彰委員長から講評をいただくことにしまして、私の挨拶はここまでとさせていただきます。

どうもありがとうございました。

2. 表彰講評

水谷長志氏

(表彰委員会委員長)

図書館サポーターフォーラムの表彰委員長としております東京国立近代美術館の水谷長志と申

します。よろしく願います。

では、第15回図書館サポートフォーラム賞の表彰についてご報告いたします。

その前に、この図書館サポートフォーラム賞が15回続いたということ、そのことをまず皆さまと確認し、お祝いで、是非、この賞が20回も30回も続くことを願いたいと思います。

節目ともなる15回の今回は、推薦により6件、個人5名・団体1件の方が表彰候補となりました。この数は、例年より若干少ない数の推薦ではありますが、今年もまた、いずれの方についても、図書館員および図書館の外から図書館をサポートするお仕事をされている方々であり、いずれも高い業績と評価をすでにお持ちの方々でありました。

例年は3件の受賞ということになるのですが、今回は、結果的には、団体1・個人1の計2つの受賞となりました。と言いますのは、受賞の2件を除くほかの4件の評が、きわめて僅差となつて、第3の受賞者を決することが、極めて難しく、決選投票という意見も上がりませんでしたので、若干少ない推薦の年でもありましたので、自然の流れで、この15回は、受賞2件に落ち着きました。正直な感想としては、今回受賞の1団体・1個人に限らず、6件すべての候補の方々にこの賞をお受けいただきかったというの、毎年のことですが、表彰委員長

の本音であります。

この図書館サポートフォーラム賞は、原則、フォーラム幹事の投票によって決めるものであり、本年も、3月12日、日外アソシエーツの会議室におきまして、11名の出席幹事の投票および4名の通信投票を踏まえ、かつ厳正な討議の結果、このような結果として決めさせていただきましたことになりました。そして受賞は、岩瀬文庫ボランティア様とエル・ライブラリー館長の谷合佳代子様、1団体・1個人が、第15回図書館サポートフォーラム賞を受賞されることになりました。

では、第15回図書館サポートフォーラム表彰理由について述べさせていただきます
まず、岩瀬文庫ボランティア様から表彰の理由を。

愛知県西尾市に所在する岩瀬文庫は、明治41年、市内の実業家・岩瀬弥助の私財により設立された古典籍中心の私立図書館を起源とし（昭和30年に市の所管となる）、重要文化財である後奈良天皇宸翰般若心経をはじめ極めて多岐に渡る稀覯本を含む蔵書を有している。和装本の綴じ直しや中性紙保存帙の作成などの蔵書の保存修復、各種講座や広報活動の支援のためにボランティア・グループが平成17年に組織され、今日50名を越す会員により一貫して岩瀬文庫

を西尾市の文化の顔たらしめて来た。古書のミュージアム」という、公立博物館としては非常にユニークな岩瀬文庫を支援するこのボランティアの活動は、地域コミュニティの文化拠点の形成の範となるものとして、その意義を高く評価し表彰するものである。

近年、MLA連携、すなわちミュージアム、ライブラリ、アーカイブの連携ということがよく言われますが、「古書のミュージアム」である岩瀬文庫は、まさにその存在自体が、MLA連携であるように見えます。その岩瀬文庫を「蔵書保存」「講座サポート」「宣伝」「イベント」そして各種の「講習／研修」を支えているのが、今回受賞の岩瀬文庫ボランティアの会です。

岩瀬文庫のホームページも小粒ながらいろいろ面白くて、「定年退職したら岩瀬文庫へ行ってみよう 文庫オヤジのススメ」など、読み物としても楽しいのですが、「古典籍書誌データベース（1～160函）試運転中 ご案内」というのがあって、このデータベース自体が、多様なMLAの資料を内包していて興味深いのですが、その案内には、

「古書ナシニ一日モ生キルコトガ難シイ そんな私たちに、明治の岩瀬弥助翁は偉大な文庫を贈ってくれました。その恩に報いるため……三ツノオ願イ」

として、

「一 古書をとりあつかう方、昔の人や事物を調べている方は、折に触れて検索をかけてみて下さい。ばらばら散在する資料の間に、さまざまな関連を見出すことができるはずです。」

一 データベースの記述に誤りや不適切があれば、ご教示下さい。……何か新たな発見があれば、その喜びを共有させて下さい。

一 ……ともに日本の豊かな書物文化を解明し、前人未知の領域に達しようではありませんか。」

と書かれてあります。

このテキストは、岩瀬文庫資料調査会によるものですが、このようなメッセージに富む活動を支えているのも、岩瀬文庫ボランティアであれば、その活動のレベルの高さは推して知るべし、であろうかと存じます。そして、文庫ボランティアが、地域コミュニティの文化拠点の形成の要になっているのが、実によく分かります。

私はまだこちらの文庫を実見したことはないのですが、名古屋で時間があつたらならば、ぜひ足を運びたいと願っております。

次に、谷合佳代子様（大阪産業労働資料館「エル・ライブラリー」館長）です。

「働く人々の歴史を未来に伝える図書館」をモットーとする愛称エル・ライブラリーは

2008年の開館であるが、その前身である大阪社会運動協会の資料室は1978年以来、労働組合や企業、市民団体の貴重な歴史的資料を数万点所蔵する歴史資料館であり、最新の労務管理情報・賃金データなどを収集する図書館として活動してきた。近年、母体である財団法人大阪社会運動協会への大阪府・大阪市からの補助金全額廃止という事態にもかかわらず、同協会の公益財団法人化を果たした谷合佳代子氏は、館長として、千本沢子（ちもと さわこ）館長補佐とのコンビにより、労働専門図書館の活動を継続しつつ、さらにsaveMLAKの活動にも果敢に取り組んでいる。実情は言葉にし難いほどの苦境にあつて、なお「21世紀のアーキビストたる自覚と矜持」を持って邁進されるその姿勢と図書館経営の維持の功績について、その意義を高く評価し表彰するものである。

エル・ライブラリーの「広報大臣」を拝命されているという関西のIさんによりますと、Iさんが、「日本一ビンボーな（決して貧しいではない）図書館」と呼んでいるエル・ライブラリーは、「気合いと努力と根性だけで頑張る図書館」であり、きっと、「日本一アツい図書館」でもある、とのことだ。

それは、補助金全額廃止から立ち上がっただけではなく、エル・ライブラリーのホーム

ページ、ブログ、saveMLAKのメーリングリスト、TwitterにfacebookなどのSNS等々、可能な限りのメディアと機会を尽くして、声を、思いを伝えよう、そこには必死さもあるけれども、それだけではなく、ユーモアと何よりも情熱を伝えるメッセージの熱さに、多くの図書館人とその枠を越えて、共感の輪が広がっているからであります。ここに、今の日本の図書館の再生の本源的な可能性を垣間見るのは、私だけではないでしょう。

おそらくは今後、劇的にエル・ライブラリーの状況が緩和・好転することはないかもしれませんが。苦戦は続くでしょう。けれども、その奮戦の過程を支え、あるいは遠望し、ウォッチするだけであつたとしても、われわれは、ただし、決して忘れないこと、忘れないことは、3・11のあの惨禍についても言えることであるのですが、日本の図書館あるいは文化継承の機関の、いずこも陥る可能性としての状況の困難さを共有する試金石として、私たちは、エル・ライブラリーの存在自体を貴重なものとして尊敬し、今後とも、観て、かつ把握して行きたいものと考えています。

今回の受賞者はいずれもユニークかつ貴重な活動例を示し、図書館あるいはミュージアムの可能性を開いているものです。推薦の方々の慧眼にもまた敬意を表したいと思います。

さて、昨年も申しましたが、図書館サポートフォーラムは、名称も Library Support Forum であります。Librarian Support Forum ではありませんので、図書館員のみを、表彰するものではありません。

図書館の外から図書館と図書館員をサポートする方へも、この賞の門戸は開かれております。来年もますます広く、図書館をサポートする多彩な方々のご推薦を切に願ひして、表彰の講評とさせていただきますと存じます。ご静聴ありがとうございます。

3. 授賞のことば

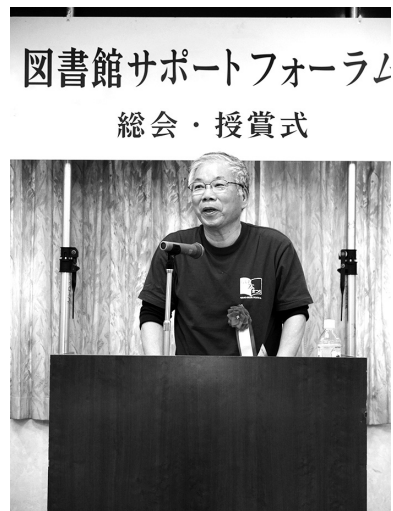
佐野三樹雄氏

(岩瀬文庫ボランティア代表)

岩瀬文庫ボランティアの佐野三樹雄と申します。本日はこのような晴れやかな席へお招きくだされたことに、まずもって心からの御礼を申し上げます。

しかしながら私の心はただいま複雑でございます。まして、大変嬉しいのですけれども、『何と場違いの所に来ってしまったことか』と震えております。と申しますのも、これまでの受賞の皆様

とその業績が、とてもご立派なことを知ってしまっただからです。



そこで本日は助っ人二人を連れて参りましたので、紹介をお許しください。天野進さん、日高晃さんです。天野さんはわがボランティアの初代代表、日高さんは古参役員です。また、岩瀬文庫の蔵書を少しでも読みたいと組織した「岩瀬文庫同好会」の、天野さんは永代塾長、日高さんは漢詩・漢文学部長であります。なお、天野さんの持っている旗は、岩瀬文庫開設100周年の記念展示会の際、私達で作った団旗のようなものです。あしらっておりますのは、岩瀬文庫創設者・岩瀬弥助翁が制定し、かつて岩瀬文庫のあちらこちらに輝いていました、岩瀬文庫の紋章です。

さて、どうぞ挨拶を申し上げたらよいか、心乱れておりますが、今回の受賞は、まだどこにも図書館など無かった明治の昔から続く岩瀬文庫、そしてそれを私費・独力で創り上げた岩瀬弥助という人物を、「ユニークで社会的意義がある」と感じられた本フォーラムの先生方が、岩瀬文庫のような学者先生や一部の古典籍好きな老人しか寄り付かんような博物館でボランティアなどをやっている変わり者集団を、代わりに表彰してくださったのだと受け止め、岩瀬文庫と岩瀬文庫ボランティアのことを少しお話して受賞の弁とさせていただきます。

私達のまち西尾市は、愛知県の中ほど三河湾に南接したまちで、私達が世界に誇る岩瀬文庫は、ここにあります。西尾市に北接して徳川家康生誕の岡崎市が、さらにその北に世界のトヨタの豊田市があります。

岩瀬文庫の蔵書は8万とも10万とも言われますが、現在、名古屋大学の塩村耕先生のご尽力で、開設以来初めての悉皆調査が行われており、今年で13年目になります。その成果は「岩瀬文庫古典籍書誌データベース」として岩瀬文庫ホームページより公開されていますので、ぜひ御覧ください。

私達岩瀬文庫ボランティアは結成9年目。毎月、定例的な作業はご報告のとおりで、時々この他に、特命的作業があります。昨年は「お化

け屋敷（怪談ナイト「岩瀬文庫」）で、小さい子を泣かせてしまいました。活動の一端として「にしお本まつり」と私達についてお話させていただきます。

わが西尾市では毎年10月、会期2日間の「にしお本まつり」を開催しており、今年で8回目になります。これは文字通り「本」のお祭りですが、最近では6,000人を超す人が来てくださいます。私達もこれに、出展者として関わってきました。

初めは、岩瀬文庫と、新しく始まったこの祭りを、市民に知ってほしいと考えました。市内の商店から包装紙を頂き、岩瀬文庫蔵書『秘伝千羽鶴折型』から「妹背山」という比翼の鶴を折り、台紙を付けて各商店に飾って頂きました。また包装紙を表紙にしたミニ和装本を作るコーナーも開きました。

3年目、「お客さんを閲覧室に入れよう」と、『岩瀬文庫に君の名を』作戦を展開しました。

お客様に、ちょっと敷居の高い閲覧室にお越しいただき、蔵書の保存箱をつくり、古典籍を格納し、箱に署名していただく（私達の通常の作業でも日付とサインを残しています）。そして最後に、箱に入れた本の請求番号を書いたカードを記念にお渡ししながら、こう言うのです。

「100年後でもあなたの作った保存箱を岩瀬文庫が責任をもって保管しています。恋人がで

きたら、おばあちゃんになったら、この紙を持ってここにいらつしゃい。あなたの筆跡が待っていますよ」。これ、なかなか高校生に人気なのです。図に乗って2年もやってしまいました。

5年目になり、私達の気持ちは、市民に閲覧室で実際に文庫蔵書を楽しんでほしい、に高まりました。「岩瀬文庫で猿は見たけど、本は知らんなあ」、これが宝物に対する、普通の市民の感想です。私達もそうでした。それを少しでも破りたい。岩瀬文庫は創設者の遺志で、一般の人にも本物の蔵書を見せる文庫なのですから。作戦名「ミニミニ閲覧室」です。保存箱づくりをやりながら、私達が素人目にも楽しめた本を、30冊ほどピックアップして、解説を作り、お客さんに見てもらうのです。初年度、汗だくの対応でした。今3年目、来場者92名、対応はやや余裕です。今までの人気は、きれいな絵本『伊勢物語』、色華やかな花や草を描く『花卉百種』、皆が題名は知っている『東海道中膝栗毛』、明治の本ですが『風俗画報臨時増刊号』。

この本の三陸沖大海嘯被害録の挿絵のリアルさは、東日本大地震のあとだけに、かなりの反響を呼びました。

「われかつて一小文庫を設立し、これを身にも人にも施し、かつこれを不朽に伝えんと欲す」

これは岩瀬弥助翁自ら、文庫創設を喜び、神社に奉納した石燈籠に刻まれた銘文の、冒頭の

一節です。ぜひ西尾に、岩瀬文庫に、いらしてください。弥助翁が待っています。

来年は岩瀬文庫ボランティア結成10年目。今回の受賞を契機に、節目の年に向けて、また仲間と何かできれば、図書館サポートフォーラムの皆様のご厚情に少しでも御礼になるかと、今密かに思っております。

このたびは本当にありがとうございました。

谷合佳代子氏

（大阪産業労働資料館「エル・ライブラリー」館長）

みなさん、こんにちは。

ご紹介いただきましたエル・ライブラリーの谷合です。このたびは図書館サポートフォーラム賞をお授けいただき、ほんとうにありがとうございます。

こういう場合、「皆様のおかげで」というのが習いですが、慣用句ではなく、ほんとうに「皆様のおかげ」と思っています。というのも、全国の皆様の支援がなければエル・ライブラリーは存続できない図書館だからです。

2008年に橋下徹知事によって補助金を全廃され、極端な財政難の中をこれまで図書館を

維持できたのも、大勢の方の物心両面のご支援のおかげです。お金がないのは相変わらずで、

実はこの受賞のお知らせメールが届いたとき、一瞬「新手の振り込め詐欺か」と思ったのです。

「お金のないところに振込詐欺のメール送ってきてもしようがないのになあ、ここ金ないで」とか心の中で思いながら最後まで読んでも振込先口座が書いていなかったたので、「あ、本物か」とわかった次第です。本物と分かった瞬間には、本当に嬉しくて、喜びが込み上げてきました。館長補佐千本沢子（ちもと・さわこ）と三人三脚で頑張ってきてよかった、としみじみ思いました。

また、今回の授賞理由の中で saveMLAK の活動にも言及されています。今朝、saveMLAK の会議が東京であり、それに参加してきたばかりで、saveMLAK の東日本震災復興支援活動も同時に評価していただけた、と仲間たちも喜んでいます。

そもそも当館がエル・ライブラリーという名前になってまだ5年目です。設置法人である公益財団法人大阪社会運動協会（社運協）は1978年の設立以来30年間、大阪府・市の補助金によって『大阪社会労働運動史』編纂と資料収集を続けてきました。2000年から8年間は大阪府の委託を受けて大阪府労働情報総合プラザの運営を行い、利用者を4倍に増やして

経費は40パーセント以上削減するという成果を生みました。

にもかかわらず、橋下徹知事によって年度途中でプラザは廃止、補助金は全廃されました。同時に大阪市からの補助金も全廃となり、わたしたちは年間収入の7割を失うことになりました。橋下知事は自分がつづす図書館の視察にも来ませんでした。本当に悔しい思いをしました。



ふつう、こういう場合、会社なら「倒産」だと思うのですが、私たちは、ここにしかない貴重な資料を集め続けて30年、数万点の労働組合や市民活動の一次資料を所蔵していました。それを散逸させるわけにはいかない、大阪の文化

歴史的な財産を次の世代に引き継ぐことが私たちの使命であり責任だと思い、新たな図書館を立ち上げることを決意しました。社運協の資料はほとんどが寄贈によりです。「わしの大事な資料を、わしが死んだら息子は捨ててしまう。社運協に預けたら永久保存や」と言って私たちに資料を託してくれた人たちを裏切ることでは

きません。図書館運営をあきらめてしまえば、責任を放棄したことになります。なんとか三年間はたとえ無給になっても頑張ろうと決意しましたが、給料が下がると生活でなくなる職員1名にはやむなく転職してもらい、残る3人が自分たちの給与を大幅にカットしました。

プラザ廃止後はただちにサポート会員制度を敷き、全国からカンパを集めました。また、無償ボランティアを名乗り出て下さる方たちがいて、この4年以上、ボランティアスタッフに助けられてきました。その方たちは大阪府立図書館を退職された司書で、プロボノ・ボランティアの典型として、私たちのお師匠さんとしても頼りになる方たちです。これまで交通費すらお支払せず、無償で仕事してもらい、さらに寄付

金まで頂戴してきました。また、当法人の退職役員も無償ボランティアですと支えてくださっています。

しかし財政は火の車です。大阪府に払う家賃も毎年値上げされ、お金集めに必死になってきたこの4年半でした。寄付以外には原稿料や講演料、本の編集料、助成金獲得、バザーなどで稼いできましたが、電話代が未払いになって、電話を止められたこともあります。その時はTwitterに「ただいま電話が通じません。お急ぎのかたはこちらにどうぞ」と私の携帯電話の番号を書いてつぶやきました。

またある時は、千本が社運協の貯金通帳を眺めながら、「谷合さん、今月わたしたちのお給料、出せません」と蒼い顔で言ったのには非常にショックを受けました。何がショックかというと、「給料が出ない」という事態に動揺している自分にショックを受けたのです。『たとえ給料ゼロになっても頑張る』と大口たたいたのに、実際にはゼロになるという覚悟ができていなかった」と気づいて、自分は意気地なしたと自覚しました。その時は幸い、カンパを掻き集めて給料は出せました。以来、遅配・無配はありませんが、綱渡り状態は改善できず、去年から正職員を2人に減員して緊縮財政を続けています。今では開き直って、「日本一貧乏な図書館」を売りにしています。

サポート会員を増やすためには広報が命、とにかく全力でブログ・twitter・facebook・メールマガジンといったネットを使った広報を活用し、さらにはエル・ライブラリーとsaveMLAKのコラボTシャツを着て大阪マラソンにも出走し、広報に努めました。マラソンなんてそれまでしたこともない初心者でしたが、なんとか6時間44分かかって完走しました。その時は、「初心者が大阪マラソンに出るぞ出るぞ」とブログに何度も掲載したところ、アクセス数が跳ね上がったので、広報の効果はてきめんにあったようです。エル・ライブラリーという図書館がある、ということを知ってもらえただけでもよかったと思いました。

先日、この苦勞を理解してくださっている方から、こんなメールをいただきました。

「本当に心よりお祝い申し上げます。授賞理由の、実情は言葉にし難いほどの苦境にあつて、なお〈21世紀のアーキビストたる自覚と矜持〉を持つて邁進されるその姿勢と図書館経営の維持の功績について、その意義を高く評価し表彰するものである。」という文言に涙が出そうになりました。地道な努力を見られる人は見て、きちんと評価してくれるのですね。大変な状況は変わらないと思いますが、ますますのご活躍をお祈りしています。千本さんにもよろしく」

サポートフォーラム賞をいただけたおかげで、このようなお祝いのメッセージをたくさん頂戴しています。本当にありがたいことです。

エル・ライブラリーは「助けられたら助ける」をモットーにしています。「支え合う社会」が理想だと思ってこれまで頑張ってきました。支援をいただいているのだから、それは図書館活動によってきちんとお返ししないといけない。また、自分たちが支援できることがあれば、それも全力でやっていかねばならないと考えています。東日本大震災直後から、文化施設の復興支援ネットワークである「saveMLAK」のボランティア活動に着手し、関西での拠点作りを担っているのも、そのような気持ちからです。

さて、エル・ライブラリーは座して支援を待っているだけの図書館ではありません。これまでアクティブに図書館活動を展開してきたつもりですし、これからも市民活動の拠点としてのエル・ライブラリーの存在意義を示していきたいと考えています。そのために、今年は新しいことを3つ始めます。

その1、「エル・ライブラリーを大人のライニングコモンズに」。平日夜に少人数の勉強会用として、閲覧室を無料開放します。図書館資料を活用する勉強会やプレゼンの練習に貸切で使ってもらう、という趣旨で、当面はサポート会員に利用を限定しますが、様子をみながら一

般開放へと移行予定です。

その2、明治・昭和戦前期の『大阪毎日新聞』の記事索引3万件をデータベースで公開します。これは『大阪社会労働運動史』を編纂するために15年かかって収集した記事の見出し索引のうち、戦前編を公開するというプロジェクトです。久保在久さんという在野の労働運動史家のボランティアによって、手書き索引が電子化されました。

その3、「れいこちゃん記念文庫」を開設します。去年の6月に11歳で脳腫瘍のために亡くなった井上玲子ちゃんを悼み記念する文庫を設置し、病気の子どもたちを支えるNPOの資料を集めて情報発信します。井上玲子ちゃんは、エル・ライブラリーの広報大臣を自任する「空手家図書館員」こと井上昌彦さんの娘さんです。玲子ちゃんは闘病中に、お父さんともどもエル・ライブラリーを応援してくれました。

二度お見舞いにいっただけなのに、なぜか私のことを気に入ってくれていたようで、親しみをこめて「たにあん」と呼んでくれました。

私が2011年秋に大阪マラソンに出走したときは、すでに右半身が不自由になっていましたが、動く左手だけでクッキーを焼いて応援メッセージも書いてくれました。父の井上さんがマラソン当日にそのクッキーをエル・ライブラリーに届けてくださり、私はマラソン完走後、

自宅に帰って一人、不揃いな形の手作り感あふれるクッキーを眺め、ポロポロ涙をこぼしながら食べました。れいこちゃんからもらった応援メッセージは宝物として今でも大切にしています。

玲子ちゃんが亡くなったあと、谷合・千本の二人が父の井上さんからいただいた「お見舞い返し」の図書カードを基金として、れいこちゃんを記念することに使えばどうか、というアイデアを出したのは館長補佐の千本沢子です。井上さんのご了解を得て、「記念文庫」を設置し、れいこちゃん一家の闘病を支えたNPO法人の支援に役立てることを決めました。具体的には、難病の子どもたちを支援するボランティア団体の関連図書などを購入し、情報を収集・発信すること、さまざまな形で少しずつ関連資料を集めていくことを通じて、市民活動を支える、という趣旨です。

エル・ライブラリーは、「お金がないから、人手がないから」といつて縮み志向にはなりません。できることは全部します。あらゆるリソースを使い、ネットワークを広げ、これからも頑張ります。どうかこれからもご支援をよろしくお願い申し上げます。

今日は本当にありがとうございました。

俳句八句

山内 明子

味噌ぷちとはじけ田楽焼きあがる

田芹摘む小遣いくるる伯父来れば

遠足や友の頭に割る茹玉子

添ひにけり秋刀魚きれいに食ふ人に

待伏せて偶然と云ふ秋灯

新そば食ふ下げたる名札背に回し

捕ればすぐ河豚の齒折りぬペンチもて

寒晴に送る柝の音や中村屋ッ



切っ先のするどい図書館へ

― 現下の、要・収集資料群、活用され、生き残るための図書館の未来 ―

恵光院 白

◆ 過日、新聞の土日曜版のコラムで、面白いフリーズを読んだ。……駅前・表通りのラーメン店はさほど流行ってはいないが、裏道、あまり人通りのないラーメン店はいつも繁盛している。これは恐らく裏通り店のほうが、味は勿論のこと、店作り、接客気配り、メニューや値段、食器・厨房いずれも客筋の好みに添ったやり方で、毎日頑張っているからであろう。このような店、つまり裏通り店は、〃商売の切っ先が鋭い〃と謂うのだそうだ……。筆者はこの表現にいたく納得した。

翻って我々が眼前の図書館たちは、多々問題を提示されている。華々しくも白い空気の新図書館オープン⇨実状から学ばない訳知り建築家のお遊び⇨結局そのマイナス状況は、入館者や司書職に負荷が永く制度化される。県立や市町村立では上座に座る文教議員の先生？から、それ入館者数がどうの、貸し出し数は？、コピー数は？、パート司書・職員数は？と、仕分け戦

でいじめられている。「私たちだって一生懸命やっているんですよ」と言った上目づかいのくぐもった返辞だけでは、偉いさんへの反論には弱い。何せテキは得票数だけのし上がってきた連中なのだから。「それよりも、この古い建物（注、そう言われる図書館が結構、在る）を

21世紀的に新しく建て直す時に、じっくり話し合いましょう！」と論駁するだけの奉仕実績、運営活力が欲しい。神奈川県立図書館では教育委員会⇨上から目線で施設費と運営費・その費用対効果は？、開館時間は？の果て、廃館？止むナシという悪魔の裏技。世の流れは指定管理者制度でしょ？。〃がばい〃の原産地・佐賀の地では、読書の自由、個人情報・スレスレの事態？。しかし他方で多くの自治体館の館長殿は、地元名門高校・名流女子高の元校長の叙勲待ちの天下り先。トシヨカンではなく、トシヨリカン（井上如・文、「ふぉーらむ」誌 第6号／2009年）ではないのか。一方都市部の

図書館ではビジネス・企業活動向けで慌てて化粧直し⇨新サービス展開と時間延長へシフト、他方「ビブリオ・バトル」という新手法で利用者・入館者集めは如何でしょう？、等々。

そこで文頭の〃切っ先のするどい〃図書館というご商売（ここでは提供するサービスの種類／内容と言ひ換えるのが相当）の場合はどうか、と考えを巡らしてみた。以下では刃物の〃切っ先の鋭さ〃に限りなく近いが別もの、やや緩やかに、拙文的には〃するどい〃隠し技と謂う程の表現をお許し頂きたい。

これまでも公立図書館の収集史では、その時代、時代の利用者の要望・趨勢を睨みながら、館の位置取りを計りながら、通例の図書以外、郷土資料、教育映画、行政報告各種、絵本、児童書、学習参考書、文庫新書本、一部漫画本、タレント本、写真集、ハウツーもの、何々文学賞本、洋書、レコードLP、テープ、VTR、CD、DVDなど収集、また入口附近のポスター・チラシなどと他領域サポート・広報活動へも拡大してきた。一方では拠点館以外は無難な全集モノや教養主義本からの、或いは稀覯本・初版本信仰からの離脱と排除、他方で地元旧家土蔵出の古文書の引き受け、ここ一五年ではカードボックスとの決別⇨PCの標準装備と各種OPAC接続、提供されている電子データ

の公開、自動借出／返却機設置、他館とのネット化運動から情報機関の一郭へ、近年はEメールでの遠距離ハードリファレンス試送付、等を辿って来た。つまり変転止まぬ世に常に即応するという、ある種コンテンツ領域であり続け、実績を重ねてきた。拙文では今後の永い期間、活動＋業務を含めての着眼・特色・公開化を実施して行くための、収集・集書・コレクション化を探り、私・試論を述べたみたい。

◆①群・ご承知のように、展覧会カタログなどはアート・ドキュメンテーション学会での研究・実践・展開を経て、既に問題は解決されている。しかしながら社会一般の物品カタログ、通例の商品カタログのコレクション化はどうなっているのだろうか。どだいこのカタログ群の、現代社会に於ける座標・位置取り・価値を、何処の誰が考えているのだろうか。ものつくり大学・図書館では収集の柱になっているのだろうか、収集の未来への意義を考察しているだろうか。社会・経済の中核、物流での内実、生産や物販活動は、何もNHKの旧プロジェクトXのみに、日経紙・同流通紙、業界紙の紙面のみに記されるわけではない。無数のプロジェクト非X、つまり同番組で決して採り上げなかった多くの会社・商店では、製品・商品・サービスの開発秘話があつたはずだ。社会の猛烈な膨

張と拡充の最中、農水業、軽工業、重工業から精密工業、サービス業といわず、各種業界の無数の『型録』が、地域ごと（生産地）（アキバ）、会社ごと（各製造会社）、業界毎（業になど薬剤師向け）、問屋業界レベル（合羽橋商店街）、受容者サイド別、我々の周辺では図書館用品の厚く重い商品カタログを想起されたい。しかも一握りの著名な『おいしい』『コピーライター』よりも、ここで挙げる『商品カタログ』以下②群、④群をガッツリ下支えするコピーライター達の方が、大多数で、文章家で、高給なのだと云う。当然である。デパートのお中元・お歳暮カタログ、各商店レベルなどへも無限に挙げられる。『時刻表』だって商品カタログの一つである。『通販生活』やセレモニーホールの法事メニューや一般の会社の営業案内、コンベンション会場の全てのブースでの配布物、就活時に学生達が手にする会社案内、オープンキャンパスでの大学の受験生向けの学部・カリキュラム頁、先生の顔々＋開設科目梗概など、カルチャースクールの「開講案内」、カラオケやレストランのメニューも当然カタログである。旅行会社の店頭／店外に夥しい数のプラン冊子群が狂い咲きである。物販会社からは家庭用品の『月刊誌』、『季刊誌』だってドサツと送られてくる。放送局の番組表はズバリ商品カタログである。人だつてカタログになる。50年前、勤務

先の会社に送られてきていた、モデルクラブ（＝会社）のCM向けタレントのカタログを見たところがある。その後「宝塚」何々組出演者や「箱根駅伝」、「J1、2」の総覧本など、その後の進化形であろう。電話帳、映画や劇場のプログラムは言わずもがな。社会の発展・隆盛などと形容されるが、開通時の道路や竣工時の建物の写真、繁華街の雑踏の静止画や動画だけで事は済まない。

たまたま過年筆者は、これ迄科学技術領域の先端と識者に認められ、泣く子も黙る神奈川県立川崎図書館に立ち寄った。そこでの収集の柱の一つ、『社史』群、『社長評伝』コレは、何やら違和感を覚えた。これらはある意味で20、21世紀の神話伝説、講談・浪花節、現代の英雄譚、偉人伝、ヒーロー物語、つまり偶像崇拜主義に偏しているよう。何やら芸能タレントや暗愚な政治家の、而して実業家の疑似『私の履歴書』、自伝・評伝が全国の図書館の棚に並ぶ事に、何程の意味があるうか。社史などは、公家さま遊び、殿様の遊蕩に等しくはないか。歴代社長の顔や工場の空撮写真、決算の数字はほとんど夢＋幻の頁に過ぎない。

山頂だけあつて、裾野が無いママだからである。「二将功成りて、万骨枯る」と評さねばならない。無論、産業記念館、企業博物館の何がしは在ろうが、名品主義、一品豪華モード＝成

功謳歌主義である。他方で物品・商品現物群全て集める事、静止画・動画で全てを語らせる事、ITデジタルで全てを保存する事、個人や一館だけで収集する事、いずれも出来ない事は明かである。

そこで全産業群の内実たる物品型録群、印刷資料、現在の仕事の仮託されたものが、アナログで登場する。これが何処にも収集されていないからである。その大群が、働く人々の歴大で充実した領域に心と目と棚を閉ざしているのに、日々実務に汗をかいている人々の証し、経済・商業活動そのものである巨大な商品・資料群の収集を全ての場で怠っているのに、『社史』たちが書架に並ぶことにどれ程の意味があるのか。これが著者の平たいものの見方である。

これは我々が生きた昭和／平成の輝けるエートス、エートスと言わなければ、働く事のいわば「力瘤(チカラコブ)」、力点／支点／作用点(＝推進態)と言い換えてもよい。これらカテゴリー群が存在しない(させない)、生き永らえない、とはどういうことなのか。

◆②群・個人や会社個々のレベルでは家電、コンピューターや自動車の「取り扱い説明書」(『取説』)。世に跳梁はしてはいないが、厳然と跋扈し、実在する。船舶、飛行機、各種エンジン、工作機械その他多くの工場設置の機械、

機器、物品、薬品類に付帯する操作マニュアル、注意マニュアル。つまり物品を使い切って生かす方法、気が遠くなる程の物に必ず添附されている。

◆③群・各組織体での業務マニュアル。全ての工場内での製造ラインでの製法マニュアル、デイズニールランドや殆どの商業施設での業務マニュアル、業務分掌、会社での服務規程、安全管理規約集など。

②、③群のコレクションはどうなっているのであろうか。もの凄い数のモノ／冊子が作られ、社員教育や研修で使われ、新人にはバイブルであるものの、いつしか捨てられて行く。家庭外、社外、市場には全く出ては来ないものの、社会的な内実としては価値は高く、その時代の様々な状況や場面を如実に言い表す物たち、印刷物たちである。かつて或る日の電車の座席、隣りに座った女性が見込んでいたのは、「はとバス」の都内・観光案内用の教科書だった、旧かな旧漢字のママの年代物の。現在では広くこの種のテキストには当然写真・イラスト・地図付き、表グラフ・タイムテーブル付き、作業展開図、練習用CD付き、段階順エクササイズメモ帳付き、果ては漫画付きであろう。或いは技術系、事務系、営業系、開発系、経理系などの別、また初級、中級、上級の別はあるかもしれない。

れない。①、②、③が無ければ世の中の現実、少なくとも全ての生産活動(消費生活は仮に措くとして)の何も分らない、摩珂不思議な社会・生活・人々の捉え方しか出来ないままである。早い話、この様な印刷物・冊子の全く無い図書館・資料館とは何なのだろうか。

前の勤務先では、旧々鉄道省が戦前期、全国各地産品、瀬戸物、鉱産物、重量機械類、農産物、市場へ届ける生鮮魚介類、等々の商品・物品の取扱い方、梱包方法、輸送の為の、物品の成り立ちからの詳細・膨大な基礎研究の冊子類を刊行していた事を知り、驚愕した。伸び盛りの組織体は大地に足(＝車輪)をつけて、本然たる活動原理をかくの如く身につけていった事をガツンと学ばされた。デイズニールランドが或る日起業でき、且つ開園出来たのは、米国からの翻訳以前のマニュアル大冊子群そのものを超高額な金額で買い取ったからと、かつて先輩からの話で知り、納得の極みであった。日本の工場群が中国や東南アジアに威張って進出できたのも、これ等マニュアルがあつたからと筆者は睨んでいる。それに例えば巨大ビル、建物の構想／初期計画／大工事／竣工、実際のオープン迄のハード／ソフト諸計画進行・行程表冊子など、また都道府県持ち回り開催の国体競技、計画・実施・終了後報告までの分厚い実践マニュアル冊子(筆者、実見)など、デパートはデパー

トなりに、スーパ―はスーパ―なりに、電鉄会社は電鉄会社なりに、固有の開発・業務展開の理念と実践方法があり、劇場には劇場の各種マニユアルがあるはず。〆切つ先のするどさ〆そのもの、目には見えないモノながら無数・無限に在るはずだ、それこそ星々の数ほど。これは実に各企業が現代に成り立ち活動し、永續性を目指して、いわば内的に自律している事の中核である。

◆④群・小さいモノ、片々たるモノながら、全国の国公立・私立・財団・株式会社・個人の、有料／無料の、大／中／小の、美術館、博物館、図書館、郷土資料館、動植物園、水族館、文学館、音楽堂、文化会館、公民館、競技場などなどの、案内チラシ・パンフ・エフェメラはどうなっているのだろうか。住民へはタブロイド判「広報誌」での小さな情報で安直に済ませているのであろうか。いやもつとある、観光地各々の小案内、遊戯施設やホテル・旅館群のそれらは？、まだ賭博場は無いようだが。大学や研究所、工場の、記念的建築、放送局、劇場、工事現場、貸し席、茶室、色々記念館、庭園、何とか庵、故有名人旧邸宅（江川坦庵・伊豆の国市、正岡子規・台東区、白洲次郎＋正子・町田市、美空ひばり・横浜市）、競技場、教会、灯台、旧駅舎、展望台、病院、地下道、ダム（過年筆

者は、魚礁というか、魚の遡上の道・人工の、を見学した、奥多摩にある。当然小パンフをゲット）、牧場、瀑布、橋梁、市場（築地など）、発電所、旧城郭、旧軍事施設、旧鉱山、国宝・重文建造物、旧建物園、旧漁協の建物、旧料亭、廃墟、自然観察館・場、釣り場、墓地、公園、海浜、洞窟、旧校舎、寺社仏閣、発掘現場、テーマパークなどの、見学用の案内・エフェメラである。通例A4判を三ツ折りに畳んだ物などがポビュラーである。「百聞は一見に如かず」、現地で観るのが最高」と言われても全国民が全てのそれらの全ての場所・館・地点・観光スポットへ出かけられるはずもなく、見学、入館／場は出来るものでもない。新駅舎、新ビルの公開時ほか、竣工記念のご披露のパンフは一過性のものと言えよう。三年前の各地原子力発電所、見学者向けの（嘘八百の）「案内パンフ」はいずれは超レアものになるはずである。

④群は通例は無料で、随時リニユールされる。この生きて呼吸して、現在の諸状況に超近接しコミットしていることが眼目である。戦後の例えば昭和30年代が話題になると、慌ててNHKアーカイブ番組を見て納得するだけでよいのだろうか。仮に俳句、短歌が文芸ならば、「展覧会チラシ」の短文紹介コピーだって多に語り、読ませる。実に時代即応・順応モードであり、つまり妙なソフィスティケート・抽象化さ

れてはいないものの大群である。瘦せても枯れてもとにかく現在日本の社会的な学ぶべき施設群、見るべき場所で、我が国の文化的な国力、産業的な繁栄・充実のアピールすべき総体。施設開設者や運営者、従業員、案内ボランティア、関係者全員の願いが充溢している。その垂れ流しの状態は看過しがたい。

④群はさしずめ、各図書館・国立館・各種の県立なんとか館の収集物群の、真逆コーナーに山積みされるものであろう。我々の専守防衛の牙城・図書館・美術館・博物館・資料館なんぞの範疇をはるかに越えている。ここでのエフェメラ・チラシ軍団だって纏まれば、決して負けてはいない。多に大切、重要で、かつ生きている。大博物館、大資料館の守備範囲外に置かれ、しかし逆にもつとも現在の、素朴・単純・実直で、現場での、飾らない、それゆえ大衆には身近で、受け入れられている。為に悲しくもコレクションの範疇に入らない、哀れな運命的資料たちである。無料配布である故に逆って、保存の対象にはならないモノ、つまり奥の院／館蔵貴重図書の対極に、下層身分の資料群に差別されている。館や会場の出口、帰りの駅や自宅のゴミ箱に捨てられる、寂しくも悲しい現実である。

◆⑤群・それから、現在個々人のレベルまで

発行者となっている、非流通的で、自費出版系冊子たちである。ワープロからDTPとして個人でも公に出来る冊子・仮綴じ群で、通例、『自分史』などと昨今云われてこれ等に含まれる。

これ以外にも無数の懐古文、例えば高齢の媼が語る先の大戦従軍看護婦記、紀行文集や詩集、歌集、句集、各種体験記、発掘記、NPO、NGO、ボランティア報告、シニアによる大学在籍時の講義録、手書き旧『卒論』、ミセス財務大臣の家計簿やり繰り記、漫画同人誌、たどたどしい私家版、未完成の楽譜、デジカメ仕上げの小画集、同人ラノベ、はては地元産業の組合記録、中小企業の社長の孤軍奮闘記、闘病記、3・11時都市難民記録集、津波からの生還記、原発避難放浪記、労働運動記録、スポーツ集団の練習日誌、同倶楽部遠征記、各地生協活動誌、団地管理組合、何とかさん追悼記、種グループ年代記（パパ・バンド、ママさんコース）、総括に到らない学生運動記録、どれもが仲間内だけに配られ、通称ミニコミ、無料配布の一群が、図書館の収集の柱になってはいない。

◆⑥群・ここでもまた、しっかり収集されていない資料群を挙げてみたい。先の③群と次の⑦群から導き出される、各大学、無数の企業、中央＋地方行政、業界、学会、組合、協会、要するにあらゆる組織体・団体の、その時々

開設される研修会、セミナー、講演会での、教科書、予稿集、配布資料、テキスト類である。広くスポーツや演劇、野外活動、訓練だつて含まれる。年齢層も分野も無数である。先①のカタログとしてのカリキュラムがあるなら、当然研修会、セミナー類での配布のテキストも無く

てはならない。これも千差万別ながら、どこもすっかりとは集めてはいない。配布されたものの形、ページにも規則性はない。昨今では多分、A4判縦位置、横書きが一般的だろう、国文、古文書などの領域を除いて。この群は、我が国の学問はもとより、科学技術、生活＋法制一般、知的水準、つまり世の中の頑張りの現況、それ以降の世の中の進む方向性がつぶさに見て取れ、真に世の中の実像であろう。これ等を前にすれば偉いさん達の畏まったお言葉など霞んでしまう。私事ながらに筆者は約半世紀前の某大手企業内の、大卒の中堅社員向け研修会（週一回、半年Ⅱクール、筆者は不参加）のテキストと講義録から転記されたノートを手許に持っている。ある時代、ある領域を切り取った姿の何事かが垣間見られよう。

◆⑦群・ここで非常に奇妙＋奇怪ながら重要な一群を提案したい。昨年一月、LSFの見学会ではJRR山手線駒込駅近くの〈東洋文庫〉を見学した。驚いた事に中国の国家高級官僚

の、〈科挙〉での最終試験、〈殿試〉の解答文の現物が展示されていた。これをヒントに考え方を拡大＋拡充＋現代化させて、我が国の各種の試験問題の大群のコレクションを展開、試行するのは如何だろうか？。古くからのあらゆる試験問題用紙・模範解答集を集めるのである。江戸期の昌平坂学問所の試験、太田南畝が高得点をとったという幕府高官・登用試験、明治以後、戦前期の各種の全ての国レベルの試験はもとより、大学入試問題、高校、中小学校の入学試験、同定期試験、業界・学会主催の資格試験、古くは計算尺検定、各会社の入社試験、社内昇級試験など、近年は江戸文化検定、京都検定、漢字検定、コンクール試験問題、数学オリンピックやヴァラエティー系クイズ番組のDVDなんかもここに集める。要するにこの世は試験と資格、挑戦と合格者が何やらルンレンで活躍する実態であるから、集め得る問題紙・集、多くの受験参考書、合格者名簿、センター試験関係、試験風景や合格発表の静止画多数、何でも集めちゃうのである。NDCはこれに関わらない。

これらを積み上げるともうその時代の実状や相貌が一挙に捉え得る、というものである。将来は、各種試験請負産業が計られよう。試験資料館創設さえ夢想ではない。

◆⑧群・以上の商業活動・物品・サービス以

外の、全国のお祭りや各種競技会、品評会、コンクール、パレード、イベント、パンフ、エフメラ、中学生・高校生を中心としたスポーツ、文化系大会記録（タブロイド判月刊新聞）も考えられ、それはそれで当然重要である。他には株主総会での配布資料や有象無象の委員会報告、また例えば平成期某日を期して撮影された、全国的主要幹線道路の街路、商店街などの写真（平成の洛中洛外図）、競技場、庭園、広場空撮写真、河川を下つての横長写真群（同・絵巻物？）、渋谷駅交差点の定点観測写真、昨今ではゆるキャラ図鑑、ガンダムなどの広場空間モニュメント図鑑、撮り鉄写真集、①～⑧群外国語バージョンも考えられよう。

◆先の神奈川県立川崎図書館では、館内を一巡した後、この機会にと筆者は同館の中間管理職の方に、特に①、②、③について縷々お願い＋具申した。しかしいつしかセ〇ム系の嚴つにお方が柱の陰にご来臨あそばしての末、暖簾に腕押し、筆者の腐勇伝は惨めなボロ負けで、帰路電車の中では、さながら敗亡の、落ち武者の心境であった。因みに永田町・NDLでの図書館某研修会でも、この種のカatalogue収集の是非を質問しても、館員にはもとより講師の同学名門大先生にも、鼻白む程にシカトされた。先年の必殺仕分け人軍団よりも恐ろしい現実、指

摘のはずだったが。

川崎館に限らず、他の多数館の話しとしても、通例の出版流通のものからだけ選べばよいのだろうか。指弾されるべき無定見、手抜き、全くの無知蒙昧といえよう。世の中に存在している、生産↓流通↓利用・活用↓再生産、或いは↓消費という社会循環活動、人々の営み、日々のがんばり、血と骨と肉、汗と涙、而してその活動が展開された時代、場所の申し子、これを構成するイメージ、痕跡すら無いのである。

これら現代平成期、右の有力資料群に意識を向けない、生きていない意味で、それ等の無い図書館、資料館とは一体何なのか。淀んで濁った空気、それ故、黴くさい、埃くさい、後ろ向き系の施設と揶揄される廃虚、切っ先は錆びたまま、心霊スポットとなり果てよう。生きていると自らは勝手に錯覚して既に死んでいる建物、これには皮肉ではなく具体例が別に在る。悪名高く廃墟化した（私のしごと館）、京阪奈地区所在、NDL関西館のすぐ隣800メートル北東、間口200メートル、奥行き100メートル、オープン7年で巨大な塵館となった。これ以上続けるとヘイト・スピーチならぬ、ヘイト文章になるので、この辺で切り上げたい。

◆以上、①群～⑧群はいずれもそれが世に生まれた時点で、その商品・製品・サービス共々、

人々の社会への大いなる願いや、技術の先端的発現、アピールであり、社会自体の前衛であつて、いわば人の生涯の何分の一かを社会に仮託した切っ先そのものである。故にこれら膨大な印刷物・資料群を集めるべきだと声を大にして提唱したい。郷土資料は重要、考古学の地元発掘資料、地元の世界／日本遺産集、同重文修復報告は欲しい、だがその地で生きていた、生活しているご当人たちの記録は無用、というのは収集理論の組み立てが大いに外れている。国勢調査で棚一連を占め、あれほどの細かい数字（数字の無限地獄）が大切ならば、憲法・法律・条例・施行細則の極詳細の条文があればどの大系＋体系（文字列の地獄、お役人の得意科目）であるならば、保険会社のポートフォリオがあれば程微密ならば、レコード／CDがあれば程の情報DBが構築済みならば、特許に関してあれ程の詳細・顕微鏡的・ナノレベルの記録が有料公開であるならば、スーパールのPOSシステムがあれば程迅速（今でしょ！）ならば、ナビ画像が路地裏まで提供されているならば、会社のHPの何やらがあれば程公開出来るならば、坂本龍馬アーカイブがあれば程集められているならば、敗空の戦闘機ゼロ戦の設計図面が重文的に有り難いならば、歴史上の天変地異の古文書が俄に重要になるならば、ここに挙げた①～⑧群の印刷物たちも、重要で、大切に、大価値を帯びる。

これ等をコレクション化することにさほどの購入費はかからず、手間もからない。無いモノねだりでもない。無論全国の図書館で全て収集せよではなく、先ずは地元発信のものから収集

を始めるのが順当だろう。近い将来、館蔵データベースは全国区網羅となるであろうから、その時に生きて陽の目を見ればよいという事になるうか。各館は右の①群⑧群の内、少なくともこれはという四種は、例えば形態によって、目的によって収集の柱とすべきであろう。有力＋有形の教育媒体、広告メディア、生活資料も含まれる。当然考現学との関係も何処かの局面で必要となるう。入力法、整理法、閲覧提供法の開拓や分担収集等の研究会、の立ち上げが早急に求められる。他方で、当面集めるだけ集め、山積みしてから考えても良いのであり、整理体系も当面サイクルで結構であろう。さすれば切っ先のするどい図書館・資料館になること請け合いである。これ等は恐らく『何とか年鑑』や『何とかハンドブック』より身近で即物的である。単なる客寄せではなく、豊穡な平成の世なるものから、実質的な未来遺産へ、の道筋を筆者は予言したい。何よりも収集の強い意志が求められる。仮にも管理者側、文教議員、教育委員会から指示・命令されたら、その時から負け戦ではないのか。それ故、自主的、自律的に提案し、実践することが眼目のはずである。

では早速アーカイブ論を共に学ぼう等とは筆者は断じて言わない。現物自体から学び取るのが最善だからである。

欧米人による浮世絵コレが雑貨群の包み紙から始まり、明治期の考古学が貝塚という古代の塵捨て場から始まり、昭和の民芸運動は下手物への眼差しから始まり、大阪・民博館は世界各地、生業の為の手作りの、使われていた生活の、無限・無数の道具類の収集から始まり、現在の大集積コレを構築してきた。現今の情報等という言葉が一般的ではなかった戦前期、美術系小個展など、案内「葉書」から一行転記することによって（『日本美術年鑑』）厩大な記録が残された事を、また情報化という言葉の草創期（戦後の高度成長中期）には、片々たるプチ・アイテムの羅列から、例えば「F M f a n」誌、「ぴあ」誌、の手書き原稿用紙から始まった事を、創刊号以後でご確認願いたい。リサイクル運動であれ、フリマであれ、太陽光発電であれ、風力発電であれ、現に今・眼前に在るモノから始まった、等々を深く想起されたい。

これらをザッと回顧・通覧しただけでも、無知、無視、放置、無作為の過誤の末、図書館が世の進展から周回遅れではないののではないのか。ニュー図書館を新築し逆に人を寄せつけないお城・天守閣化や、指摘されないのだから、常に善い事をやっているのだと錯覚する、つま

りサービス精神の勝手なブラック化に陥ってはならないのである。館の運営も、床の間然・貴賓室然ではないはずである。P Cと睨めっこしている事だけが、仕事のメインではないと、今再び自覚せねばならない。常に回り道を、日々延びしるを自ら探すべきだ、と考える。

◆以上を要するに、右のような提案、「A・手つかずの開拓すべき領域、フィールドが眼前に在り、B・出力形が想定でき、C・その上でしっかりした指標を自ら立て得る時、D・同その立場」、この事だけは如何なる産業、領域、職務に於いても僥倖であり、毎日の仕事、未来へむけては幸運なのだ、と言うことを、図書館人たち、資料探索人たちは、肝に銘じてほしい。

それゆえ拙文はこれらを悉く無視してきた半世紀の懺悔のはて、リタイア組シニアの殆ど遺言という、昨今の流行語で謂えば「収／集活」、「コレ活」への伏しての懇願である。怪著『武士の家計簿』のひそみ（陰の収集法）に倣って言えば、若者よ荒野をを目指せ、ではなく、目には見えぬ立て場を彷徨え、それも「本日、只いま！」であろう。「内的着眼は、するどくあるべし」と言えようか。

（一読多謝）

ボヘミア、癒しの大い

岡田恵子

昨年秋、久しぶりにプラハ混声合唱団の歌声を東京中野で聴いた。指揮者・団員はかなり若返っていたが、やはり日本ではなかなか聞けない響きであった。耳鼻咽喉科医のクララをその中に見つけたときはうれしかった。

話は二十三年前に遡る。一九九〇年五月の連休、私は合唱団わだち（注）の団員となつて、チェコに演奏旅行に出かけた。プラハはその前年十一月のビロード革命の後で、自由の空気が満ち溢れ、好天とも重なつて人々の心もまさに春、町は華やいでいた。

「来年の連休を家で過ごすのはつらすぎる」と、私は前の年の夏休みに思つた。五月の連休に母と会津を旅行していた。戦中戦後の何年かを疎開先として過ごしたところである。母はその五日後に、突然襲つた心筋梗塞で亡くなつた。とてもショックだった。職場で働いているときは忘れていられたが、一人住まいの部屋に

帰ると、母を失つた悲しさは怒涛のように押し寄せるのであつた。夏休み、喪に服していたい気持ちと、形見分けなど、母の遺品を整理するのはこの時しかないとの思いで、申し込んであつたIFA（国際図書館連盟）パリ大会にも参加せず、どこへも出かけず過ごすことにした。しかし、結果としてこの作業は母と同居していた姉との意見の相違で果たせなかつた。パリ行きを断念したことも、チャンスを棒に振つた悔しさとして残つた。そのときのつらさが次の連休の過ごし方を決めたのだつた。

チェコに演奏旅行に行くとい聞いた合唱団に、その秋私は入団した。この合唱団には、以前から関心を寄せていたし、演奏を聴いていたこともあつた。わだちのレパートリーはチェコの歌が多い。幸い私はチェコ語の初級を以前学習していて、発音の仕方は曲りなりにわかつていた。合唱の経験も六年ほどあつた。でも、出発前に次々と新しい曲が追加され、練習の暇もな

く、朝食をとりながらも、テープを回して旋律を覚えた記憶がある。団の指導者である諸井昭二先生（注）は、寛大ですぐれた指揮者であつた。先生と、先輩団員たちの温かさにつつまれて、入団して一年に満たない私が、旅行に参加することができたのだ。

宿は、合唱団と友好関係を築いていたプラハの合唱団員の家庭にホームステイである。私と、もう一人の仲間を受け入れたご夫妻は、戸建住宅に住んでいて、十八歳の娘さんが英語で通訳をしてくれた。お客さま用の部屋がある階には、お風呂場が家族用とは別についていた。そのお宅の様子では、平均収入は日本と比べて少なくとも、この国の実生活は日本より豊かであることを感じさせた。

滞在中は、毎日のようにあちこちの町を訪れて演奏会があつた。日本人がチェコの歌をチェコ語で歌うので、聴衆は耳をそばだてて聴いてくれる。日本の歌も何曲か歌つた。私はプラハを拠点として、観光と語学研修ですでに二度この地を訪れていたし、それ以前のフランス滞在中で知り合つたチェコ人の友だちもいた。友人たちはプラハの演奏会場であつた国立博物館に駆けつけてくれた。その博物館では、中央にある美しい階段のところで、休館日などによく演奏会が開かれるということだ。コンサート・ホールでは味わえない環境での催しである。

久しぶりの友人たちとの再会、プラハ混声合唱団の心温まるおもてなし、美しいボヘミアの旅行。母を失った悲しさは、そのときどこかへ飛んでいき、風薫るチェコの春をおかげさまで楽しむことができた。語学研修の時もそうだったが、ボヘミアは私にとって癒しの大地となったのである。

(注) 諸井昭二(一九三〇～二〇一一)

合唱指揮者、作曲家、音楽教育・評論家。

一九七〇年からチェコスロバキアの合唱音楽の研究を奨め、合唱団わだちとともにこの国の合唱曲の演奏・紹介と普及を続ける。一九七九年、チェコ政府よりヤナー・チェク文化勲章を受章。

合唱団わだちとプラハ混声合唱団(永年の指揮者は、巨匠コシユラーの弟、ミロスラフ・コシユレル)は、三十年間にチェコで八回、日本で四回相互に演奏旅行を遂行した。



土足はだめよ

今まど子

何時の頃のことになるのだろうか。上野の図書館に行った時のことである。

一昔前の帝国図書館である。入口は地下なので、地下の入口から入ると、下足番のおじさんがいて、男性の利用者には靴カバーを渡していた。靴カバーは底が黒くて、上の靴をカバーする部分は茶色い布製で口の所にゴムが入っていた。男性の利用者は次々と入ってきてカバーを受け取り、靴の上から履いて廊下を奥の方へ歩いて行くのを見てみると、ひどく歩き難そうに見えた。靴に比べてカバーはとても大きく、脱げないように歩くのは楽ではなさそうだし、カッコも悪かった。大きな靴カバーは外国から輸入したのだろうか。あの頃のことだから、占領軍の置き土産だったのかもしれない。

女性かというと、藁に布を編みこんだようなぞうりを渡され、靴を預けるのだ。わらじのようなぞうりであったから、鼻緒がついている。私はナイロンのストッキングをピッチと履いて

いたので、ぞうりが上手く履けない。足の先にひっかけてそろそろ床を引きずるように廊下を歩いたが、二階へ上がる階段では、一段上がるごとにぞうりが足から外れてしまう。やっと3段目まで上がったとおもうとぞうりが足から外れて、床まで転がり落ちてしまい、また1段目からやり直しだった。とうとう諦めてぞうりを脱ぎ、手に持って、素足で二階に上がり、またぞうりを足の先に引っ掛けて歩き出した覚えがある。

その頃の図書館は、「土足禁止」あるいは「土足厳禁」の張り紙が当たり前のように入口に張ってあったものだ。私は鎌倉に住んでいたのでも、鎌倉の図書館へ何度か行ったが、やはり玄関でスリッパに履き替えなければならなかった。スリッパはボロボロで汚くて、とても履き替える気になれず、裸足で入っていった。冬は床が冷たくてとても長くはいらなかった。それでも本の貸出はしていたので、借りて帰った

覚えがある。私の横で雑誌の返却をしにきた和服のおばさんは、返却期限が過ぎていて罰金を払わされていた。

若い人たちにこの話をしたところ、

「ゲソク……?」

「ゲ……なんですか?」

と口々に聞かれ、私の方が「えっ!」とばかり驚いた。「下足」という言葉が通じないとは思ひもしなかった。その上、

「バツキン? 取ってたんですか?」

そう言えば、今靴を脱いで入る図書館は無いし、いつの間にか罰金を取る図書館も無くなった。何時から下足がなくなったのだろうか。

下足が必要だったわけは、一つには道路が舗装されておらずドロ道だったから、文字通り靴はドロだらけの「土足」だったので、ドロまみれの靴で図書館に入ってこられてはたまらなかったからであろう。

もう一つの理由は、女性が和服に下駄を履いているのが普通の姿であり、また、子どもたちも下駄を履いて駆け回っていた時代であった。

そういえば、占領軍が残していた記録の中に、こんな記事があったのを思い出した。占領中のことだが、占領軍が日本人のために図書館を開設しており、それがいわゆるCIEの図書館であった。CIE図書館の館長たちは皆アメリカ人で、3分の2が女性であった。館長たち

は年に1、2回集って方針を話し合ったり、情報の交換をしたりしていた。その記録の中に

「児童室で子ども達が歩き回るので、下駄の音 (sound of geta) がやかましくて閉口だ」という館長のほやきが残されており、読みながら笑ってしまったが、その問題には解決法がなかった。靴が手に入るようになったのはもっと後のことだったからだ。

下足がなくなったのは、東京オリンピック（1964年）の後だったのではないだろうか。オリンピックで、東京に高速道路ができたり、道幅が広がって舗装も進んだ結果ではなかったらどうか。

罰金は「延滞料」と言われていたが、わが国の図書館は一部を除いて館外への貸出しをしていなかったから、延滞料が問題になることは無かった。しかし、ある時から貸出しが図書館サービスとして広まり、期日までに返却しなかった利用者から延滞料を徴収することが問題として出てきた。各図書館の利用規定に「延滞料」が決められていたが、1950年に図書館法が公布され、「公立図書館は、入館料その他図書館資料の利用に対するいかなる対価をも徴収してはならない」（17条）ことになって、延滞料の徴収はこれに抵触するのではないかが議論され、なし崩しに延滞料の徴収は利用規定から消えていったのではないかと考えている。

これらのことも、図書館史の1頁といえるのではないかと思いき残すことにした。

（中央大学名誉教授）



HESO

しやれ神戸（井上如）

HESOについて、和・漢・洋の三つの文明（と言っても固有の言語の存在すら疑わしい和は、文化のレベルであって文明とは呼べないが）において、どのような意味を担った文字表記が用いられてきたかを眺めることによって、HESOを、無駄にして構わない物と見なすか、それとも粗末に扱ったら罰が当たる大切な物と見なすか、これら三者の比較を試みたい。結論を先に申せば、三者とも、HESOは大切な物と見なされる傾向があるが、それでもやはりそこにはマジメさとフマジメさの間に程度の差があることを明らかにしたい。取り上げる文字表記は、和はもちろん「へそ」、漢はもとより「臍」、洋は、今の場合、英語の「navel」に代表させることにする。取り上げる順番は特に無く、三者をごたませにして比較することに重点を置く。また、手元に十分な資料が無いため、いささか説得力に欠ける部分があることを諒せられたい。

HESOの漢字表記は「臍」である。現行の漢字検定試験（漢検）の級位は10級から1級までの12段階（1級と2級は、更に準1級と準2級を設けたため）がある。漢検の書き取りの試験で、どの級から上は「臍」をちゃんと書けなければいけないのか知らない。かなり低い級位の人でも「臍」ぐらい書ける人は多からう。しかし、たとえば、あしかの一種に「オットセイ」というのがある。このオットセイの漢字表記は漢字で3文字だが、ちゃんと書ける人は少なからう（そこらへんのポケット版の国語辞典にもちゃんと載っているから、気になる人は調べてみるのも良いが、ますます奇奇怪怪という思いをするだけだろう）。中には、オットセイの臍は漢方医学では重要なアイテム（かどうかは知らないが）だから、ひよっとするとオットセイのセイは「臍」という文字ではないかという鋭い勘が働く練達の士も、なにせ名にし負うLSFの会員の中だから、おられるかもしれない。

近頃ちまたに良く流行る、おなじみの四字熟語で言うと、後悔噬臍（こうかいぜいせい）と言うのがある。四字熟語だけを集めた辞典によると、意味は「後になって悔やんでも、いまだどうしようもないこと」とある。「噬」は噛む、「臍」は臍のほかに「ほぞ」の意味もあるから、「噬臍」は「ほぞを噛む」ということ。辞典の解説は、自分のへそを噛もうとしても噛むことはできないように、後で悔やんでもどうにもならないと言う意、とある。

さて日本語のへそだが、広辞苑には次のようにある。へそ「臍」①腹部の真ん中の小さなへこみ。臍帯（さいたい）の取れた跡。ほぞ。（和名抄三）②石臼や重ねだんすなどの重なり目に設けた小さな突起。③ものの中央にある高い部分やくぼんだ部分。「あんパンのー」。たったこれだけである。日本国語大辞典のへその項を見ても、まあ似たり寄ったりだ。日本では、へそという語そのものよりも、臍を出していると雷に臍を取られるという俗信の方に面白い話が多い。

有名な川柳に、「かみなりを まねて 腹がけ やつとさせ」がある。浜田義一郎編の江戸川柳辞典によれば、「鑑賞」風呂か行水か、出てからだを拭いてもらいう子どもは、母親の手をすり抜けて走り廻る。やつとつかまえて、雷様にお臍をとられますよ、ゴロゴロゴロ、たい

へんたいへん」などと手ばしこく腹掛けをさせる。夏の夕方の家庭内の小景を実にあざやかに描き出した佳句」とある。たしかに、足柄山の山奥で、けだもの集めて相撲の稽古に明け暮れていた金太郎だって、臍をとられないように、腹掛けだけはチャンとしていたのだ。

中学生の頃だったと記憶するが、職業野球チームの阪急に山田伝という外野手がいた。ポジションはセンターで俊足。打球がまだ上昇している間に落地点に達して、球が落ちて来るとやお腹にグラブをあてがってスポンとその中に収める。その捕球のすがたが何とも言えず滑稽なことから、人呼んで「臍伝」とあだ名をつけた。センター後方を襲うライナー性の大飛球を、背走また背走、くると向き直った瞬間に、スポンとへそに収める。グラウンドで実際にやってみると判るが、普通のフライだって腹で捕球するのはまず不可能である。自分は、野球が好きだった親父に連れられてよく後楽園球場に臍伝を見に行ったものだった。

むかしむかし、NHKのラジオ番組に「とんち教室」というのがあった。レギュラーの出演者の中に春風亭柳橋がいた。出題は「雷」。柳橋の名答は次の通り。雷が、下界の人間から筆記取った臍を貯めていた臍かこをうつかりしてひっくり返し、下界にこぼしてしまった。下界は雲がかかっていて、よく判らない。何でも海

と山が複雑に入り組んだ海岸線の地形だったと雷は思った。それらしいところを見当をつけて訪ねて回る。いかにもそれらしい地形の「浜名湖」上空では、特に「血眼」になって探したり、もう少し西だったかと思つて、瀬戸内海の上空まで来て、雲の上から下界に向かって大声で、「おおーい！ そのあたりに臍内海!? 臍内海!」

さて、日本語でへそのことを英語で *navel* と言う。夏場の果物売り場に山と積まれる軟式野球のボールのような蜜柑を、よく誤つてネーブル・オレンジと呼ぶ人がいるが、あれは別にナボリの蜜柑ではない。ちゃんと英語で *HES O* を意味する *navel* (発音がネーヴルだから余計いけない) を冠した *orange* すなわち *navel orange* である。現に、我が国でも、地方によっては、ネーブルオレンジのことを臍蜜柑と呼ぶところが、三重県、大阪府、島根県等、あちこちにある(これホント)。また、研究社の英和大辞典の *navel* を見ると、1 臍、2 中心点(中央)、3 ネーブル・オレンジ、4 「紋章」*nombil* (紋章学の用語) と四つの意味が載っている。即ち、わざわざ *orange* などと付けなくとも、*navel* だけでちゃんとネーブル・オレンジの意味なのだ。また、*navel* を用いた慣用語として、「*contemplate one's navel*」を載せ、意味は「(哲学的) 瞑想に耽る」とある。サー

スガアとでも言う他ない。それにしても、目録や分類でいそがしい LSF 会員の方も、改めてネーブル・オレンジを掌の中で転がして調べていただきたい。オレンジの臍とご自分の臍と、下着だけになって思わず見比べて見たくなるほど良く似ていることに気付くはずだ。中にはご自分の一物より、オレンジのそれの方が、色つやといい、よっぽど立派だと言う人も多数おられよう。やはり下着の中にしまつて置く方が無難である。

更にこの *navel* は、OE (オールドイングリッシュ) の *nafe* から由来している。意味は、オックスフォードの語源辞典によると「*central block of a wheel*」とあり、研究社の英和大辞典の *wheel* (p2408) には絵が載つていて、一般に馬車や荷馬車の車輪の、*hub* と呼ばれる中心部分であることが一目瞭然になっている。絵と言えば、実は「臍」という文字も、藤堂明保氏の漢字語源辞典や(学研) 漢和大辞典をみると、「おへそを臍」というのは、へそが人体の中央に位置して、へそによって人体が上下左右、斉等に分けられるからだ……とあり、篆書の字形にはっきりそれを示してある。勝負あった! と言うか、*nafe* にしろ、臍にしろ、はっきりイラストがものを言っている(絵をお見せできないのが何とも残念至極) のに対して、へそは八百屋の店先に転がっているだけだ。漢・洋に

対して、言葉だけで固有の文字の無い和の何と
いう不甲斐なさ！——こんなことでいいのだ
ろうか。



川柳にチャレンジ

末吉哲郎

このところ川柳を勉強している。千葉に転居したのを機会に始めたのだが、柏市に本拠を置く東葛川柳会と千葉市の住いの近くの蘇鉄クラブの句会にそれぞれ月一回顔を出している。

東葛川柳会は会員三五〇名を擁する全国的に見ても規模の大きい川柳会で傘下にいくつかの勉強会がある。故今川乱魚氏が三〇年ぐらい前に立ち上げた会で、同氏は全日本川柳協会の会長も務めたが三年程前に亡くなった。同氏とは小生が経団連に在任中から仕事上の付き合いがあった。ある時今川氏は川柳の大家でもあったので「行革をテーマに川柳募集はできませんかね」と経団連会長の土光敏雄氏が殊更に行革に熱心だったのを受けて話題にした。彼は「それは面白い。やりましょう」と即座に賛成してくれた。そしてソニーの盛田昭夫会長を責任者に今川氏を審査委員長に経団連広報センターマターで「行革川柳」の募集を行なうことにした。経団連が川柳募集ということでマスコミも

話題にしてくれたせいで全国から八千八百句の応募があった。その中から「早急に検討善処遺憾です」と役所言葉を並べて皮肉ったのが最優秀句に選ばれたが、審査員に評判だったのが特別賞の「スリムがいいなあ役所もうちのかみさんも」だった。この結果については各方面で話題になり、朝日の天声人語欄でも取り上げられた。小生もこのようなことから川柳に興味をもったが、今川氏はどうせやるならじっくり基礎から勉強して始めて下さいとのことだった。そこで遅まきながら勤めを退職してから、大学の公開川柳講座を受講してから句会に参加しているわけである。

参加している川柳会の参加者も企業や教職等のOBの年配者が多く、女性陣の参加者も多い。川柳会会のやり方は事前に課題の宿題が出ていて、会の始まる前に自作を短冊に書いて無記名で投句提出する。それを課題毎に進者が別室で選句する。通常は各進者一人だが二名の場合

もある。

そして選句が終わると壇上で進者が講評と共に入選句を読み上げる。読み上げられたらその句の作者が自席から自分の名前を応答する。これを「呼名」と称し記録係が短冊に名前を記入する。これを課題毎に繰り返すのだが、いつも読み上げられるとは限らない。一つも読み上げられない場合これを「全没」と称し、二次会の飲み会などでばやくことになる。

小生も初めの頃は全没が続いたが、そのうちぼつぼつ拾われるようになったが、呼名されると手を上げうれしくて声が上ずったりするのである。

川柳も短歌・俳句と並んでわが国が世界に誇る短詩型文芸の一つであるが、同じく五七五調でも俳句と異なる。俳句は自然を対象に季語を使い文語体で詠むのに対し、川柳は人間を対象に口語体で吐くもので、ウガチ、おかしみ、軽みの三要素を主体とするもので表現形式は異なるが長い歴史をもつ文芸、平たくは時事川柳、ユーモア川柳などに仕分けされる。しばらくは浸って勉強を続けたいと思う。

別項にこれまでに拾われた川柳句をいくつか紹介させて頂く。

趣味の一つに油絵がありグループ展や公募展に出展したりしている。東葛川柳会の月刊川柳

誌「ぬかる道」の表紙絵にどうかとの誘いがあり一年の約束だったが九ヶ月間掲載させて貰った。条件があつて画の説明と共に画に関連した小文と川柳を作句して同じ号に掲載するのがあつた。大変勉強になったが、立体的で面白かったとの評価もいただいた。

入迸句

風の便り君はますますすご発展

もの忘れ眼鏡ケイタイ人の顔

同窓会出来の良いのが先に逝き

会社では大黒柱家荷物

医者通い内科整形歯科眼科

隠すもの何にもなくて劣等感

人生の花道掃いて歩こうか

○老後ナウやりたいことは山とある

(記念大会特選 柏市長賞)



非常勤講師

平井紀子

今年の5月に、T大学で司書課程の講師をしているI氏より、授業1回分を担当してほしいとの依頼を受けた。科目は「図書館情報資源概論」で、様々な主題分野の多様な資料・情報について、その出版と流通、収集から保存までをカバーする広範な授業内容のようである。

私が受けたのは、「様々な主題分野の資料・情報とニーズ」の3回の授業のなかの1回。依頼テーマは「服飾資料の諸相」であるが、実際には、拙著『装いのアーカイブズ』をもとに、「服飾資料の特徴と、もと勤めていた大学図書館での西洋服飾関係文献の収集と蓄積などコレクションの構築」についての話、服飾資料の特徴である1枚ものの華麗なファッション・プレートも学生に見せてほしいとの趣旨であった。実施日は6月中旬に決まり、約1カ月の準備期間があった。

私も3年前までは、非常勤講師をしていたので、科目名は異なっていたが、内容は見当がつ

いた。

私の授業の見せ場は、たぶん、ファッション・プレートの映写であろうから、事前に大学に行き、講義をする教室で教材展示機OHCを動かしてスクリーンに映す予行演習が必要であろう。

この機器の稼働作業は、非常勤時代に、ずいぶん手こずり、いやな思い出が沢山ある。順調にいくかどうかは機器の新旧やITの整備環境にもよるが、その時の運としかいいようがない。管理室で幾つも連なった鍵の束を借りて、授業開始時間より早目に教室に行き、電源を入れて開始するが、いざパソコンを動かそうとすると起動しない、スクリーンに映らないなど、操作に誤りがあるのか原因は不明であるが、ハナからうまく進まず、1コマの授業が気分悪く終わった経験を何回もしている。3年以上も昔のことなので、今はそのような不備はないであろう。

今回は初めての所であるから、ヘマは出来ない。使用機器はOHCの操作だけであるが、被写体の写真・図を置く位置や方向、拡大・縮小の調整が重要となる。教室は100名ぐらい入る大教室であるが、機器類はコンパクトに整備されていた。

当日は、機器に不安をもつ私を気遣い、所用時間との兼ね合いもあるので、I氏が機器の操作を担当してくれた。私は、幸いにも、OHCに触ることなく、講義に専念できた。結果は、まああの出来ではなかったろうか。

講義終了後に、学生に授業での質問・感想を書かせていたが、これは出席のチェックにもなり、多くの教師が実施しているようである。

数日後、I氏からメールで数通の学生からの質問票が送られてきた。受講学生数は85名程で、1年生から4年生まで所属学科も様々であったが、理解度は想像していたより良好で、お世辞半分かもしれないが、講義を良く評価してくれていた。

質問票には、専門的な鋭い質問もあり、同じ講義をしても学生の受け留め方は多様であることを実感した。質問には再度コメントを、こちらから返すことになっている。

1回の授業といえども、その準備から最終のコメントまでは一仕事であったが、緊張感を覚醒させ、満足感を味合う体験ができた。

一日講師のこの体験は、かつての非常勤時代を思い出した。

私は、週1度であったが、3年前まで、5年間もT大学の非常勤講師を勤めた。いま考えると、こんな遠方によく5年も通ったものだと思う。1年目は、通勤の車中が楽しみだった。山梨に向かう中央線の車窓から見る四季折々の景色は、心を和ませてくれる。とりわけ入学式の頃は、一週間見ぬ間に葉桜から萌えたつ新緑にかわり、晴れた日は稜線がくっきりと際立ち、野っぱらには黄色やピンク、紫の雑草が花を咲かせている。大月駅から富士急電車に乗り換えると、運がよい時は絶景の富士山が拝める。駅を降りると、東京とは空気が違う。晴れた日は、高原のように爽やかで、曇った日でも空気が重たくない。大学まで10分とかからないが、重い鞆を持つのが辛い。授業で実際に使用することは、ほとんどないのだが、学生に紹介しようと本や新聞の切り抜きなど、あれこれ資料を詰め込み、やたらと荷物が多くなる。資料を持たないと安心できないのは、新米教師の象徴かもしれない。

授業日は水曜日であったが、この日は教授会の日らしく、非常勤講師の授業が多く組まれている。

非常勤講師室は、長い机が5列、1列に5、6脚の椅子があり、30人ぐらいの席となる。定

席ではなく、早い者順に好きな処に座る。

1時間目の授業の時は特に忙しい。駅から早速で大学に行き、出勤簿に印を押して、一目さんに印刷室に向かう。授業用の配布資料のコピーのために印刷室は満杯で、コピー機、印刷機はフル回転だ。印刷室のおじさんも手慣れたもので、あの先生は自分で出来る、この先生はモタモタしていると見極めて、ニコニコと嫌な顔もせずに、うまくコントロールして授業開始時間までにオールセーフ。大学では一番お世話になった方だ。勿論、1週間前から準備しておけば、こんな綱渡りをしないで済むのだが、追加資料や修正がどうしても出てしまう。

新米講師のひがみかもしれないが、非常勤講師の待遇は良くないと思う。まず、個人用ロッカーが全員には無かった。私の私物入れは無かったし、教務からの説明も受けていない。同期の新任の先生のなかには、すでにロッカーを確保しているか、秘密の場所を獲得しているらしく、プリントの束をどこかに収納している。受動的で要領の悪い私は、荷物の置き場がなく、午後の授業用プリントは手提げ袋に入れて机に置き、スカーフで覆っておいた。2年目であったろうか、退職する女性の先生のロッカーを使うことができて、すっきりした机のスペースで、お茶を飲み、やっと自分の居場所を得たように落ち着けた。

定席がないことは、学生の教育にもマイナス面が多い。専任講師であれば、もっと良い指導ができたのではと思うことが多かった。専任であれば、個室か、それに近い研究室が与えられるであろう。だが、非常勤は、昼休みに学生が質問などを聞きに来て、ゆつくりと対面して話す場所がない。

「〇〇先生、いらっしゃいますか？」と学生が来ても、教師同士は顔を知っているが、顔と名前が一致しないから、互いに顔を見合わせ「居ないみたいですよ！」とドア近くの先生が代表して答える。

新米非常勤は先輩の行動を見て、職場に慣れ、慢性化してしまう。

T大学固有の実情なのか、他大学の状況は分からないが、教育環境を整えてほしい。お世話になった大学を悪く評したくないが、非常勤講師の待遇とは、その程度のものなのかもしれない。

「控室」という首都圏大学非常勤講師組合から4ページ程のパンフレットが出されている。これがどのような性格のものかは知らないが、毎週、机に置かれているので、数号読んだことがある。賃金・待遇・解雇の問題等が掲載されている。向いに座る40代の男子の先生は、非常勤を3校掛け持ちしているが、生活は苦しいと「控室」を見ながら言っていた。非常勤講師の

問題は根深く、私などには現状把握として受け止めるほかない。

私には、もっと直接的な授業に関わる課題がある。

まず一番は、主任教授と6、7名の担当教員とで教科の話し合いが持たれないことである。司書課程では、教員には4月の初めにシラバスが大学HPにアップされて初めて知らされる。事前のミーティングはなく、決定事項がいきなりHPで告知される。担当する先生の顔も分らない。「講義要項」が冊子にまとまるのは、五月の連休明け頃であろうか。同一科目を分担して行う場合や、科目構成の調整も必要であろう。こうした問題を教務に提案すべきであるが、新米の私が率先して意見をいうことではないように思う。

担当科目の一つであるレファレンス演習では、ネット検索が主流になった頃で、書誌・索引などで文献検索を中心とする私の授業は、難しいと言われた。学生は、「ネット検索だけでレファレンスをやってはいけないのですか」と、まじまじと質問する。一步踏み出して、丁寧に説明するのだが、しだいに心が萎えていく。

図書館関係の仕事に就きたいと相談も受けるが、中途半端な説明や個人的な思い入れは、しないようにしていた。非常勤講師は、所詮、非常勤であり、担当教科に専念すればよいのだと

自分を説得する。それは無気力なのではなく、責任をとれない仕組みを考えるからだ。

講師生活で、もっとも教師らしいと思うのは、学生とのコメントのやりとりであった。

ほとんどの学生が、短文であっても、しっかりと意見を述べていた。個人としての学生は真面目で素直であり、私のコメントに、さらに意見を求める学生の質問には、こちらも丁寧に文章で返した。

帰りの車中で質問用紙を読む。このときだけは、教師としての誇りを享受出来た。

単調な講師生活が続けられたのも、学生の質問や真摯な意見が支えになっていた。

関根正二と生田長江《女の顔》(神奈川近美蔵)をめぐつて

—美術・演劇・文芸をつなぐMLA

水谷 長志

本年(二〇一三年)五月九日の朝日新聞朝刊の〈ひと〉の欄に「ハンセン病と闘った文人の評伝を出版した荒波力さん(62)」^{あらかみちから}が載ったのをご記憶の方も多いだろう。その文人とは「明治・大正の評論をリードした生田長江(一八八二〜一九三六)」であり、荒波氏の著作は『知の巨人 評伝 生田長江』(白水社 二〇一三)である。

「大正期の作家の中でも特に文芸批評で知られる作家として最も目立つのは生田長江である」⁽ⁱ⁾「(ドナルド・キーン)の帯を持つ本書であるが、そしてニーチェの『ツァラトゥストラ』やマルクスの『資本論』を翻訳し、『著述の量においてはほとんど『鴉外全集』に匹敵」⁽ⁱⁱ⁾「(佐藤春夫)しながら、『今ではその名さえほとんど知られていない』⁽ⁱⁱⁱ⁾と荒波氏も書いたように、やはり長江は長く忘れられた文人であった。

筆者は一九九九年三月に鳥取県立図書館を訪

れた後、鳥取駅から山陰本線と伯備線を乗り継いで長江の生誕の地である同県日野郡日野町の根雨駅に足を延ばした。根雨駅近くの延暦寺境内には長江の顕彰碑があり、町立図書館には長江の関係資料が多く揃っていた。この忘れられた文人を追ってなぜ鳥取と岡山の県境にも近い、この地を訪ねたのか。

荒波氏は一九五一年に生まれ、静岡工業高校卒業後、碎石会社などに勤務の後、作家として『火だるま』(村山) 槐多^(一八九六)『春秋社 一九九六』、『青嵐の関根正二』(同 一九九七)などを出されている。槐多(一八九六〜一九一九)と関根(一八九九〜一九一九)は、大正期夭折の画家の代表であり、ともに一九一九年、二三歳と二〇歳にして世を去っている。東京国立近代美術館は槐多の《バラと少女》、関根の《三星》(図1)を所蔵し、大正洋画のコーナーにあつて、岸田劉生、萬鉄五郎と並んで観覧者の目を引きつけて止まない。

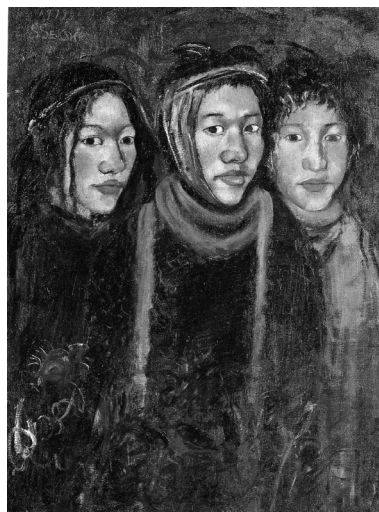


図1 関根正二《三星》一九一九

私が根雨の地を訪ねたのも、長江と荒波氏の第二の評伝である関根との関係に手繰り寄せられてのことだった。

関根と長江が遭遇した場面からまず始めよう。

長江は翻訳と文芸批評の仕事に加え、戯曲にも手を染めて、処女戯曲『円光』を雑誌『中外』創刊号(一九一七年一〇月)に掲載している。これは一種の観念的恋愛悲劇のようなものだが、翌年の大正七(一九一八)年五月二九と三〇日、有楽座で新劇研究会・国民座の第五回公演に生田長江作『円光』として、久米正雄の『地蔵教由来』などと並んで上演された。

以下、秋田雨雀の日記から…

大正七年五月二八日「午後の一時ごろ、有楽

例えば、ある作家の作品を追いつめるとき、美術館にいる私たちは、当然まずはミュージアムのコレクションから始めたとしても、そこに留まる訳ではなくて、ある時にはさまざまな施設のライブラリ（L）やはたまたそのアーカイブ（A）のエフェメラや写真へ、そして美術の枠を越えて、演劇や音楽の領域までもに越境し、その主人公が関与する分野であればどこへまでも足を延ばし、手を広げて行く。

対象は作品（M）であつたとしてもLやAと遭遇しながら、あるいはMLA相互の連関を見出しながら調査し、研究する。そして思いがけない連携の鎖を見出すときに、一番の面白さ、醍醐味を感じる。

MLAの連携というのは、館と館との連携、制度や機構の設計と改革でもあるのだが、一方で調査すること、研究すること、なによりも調べることの広がりと深化の可能性を拓くことではないかと思ひ、感じている。

ここ数年来、慶應義塾大学と学習院大学の博物館学、アーカイブズ学の課程の一コマを担当しているが、最後の課題には、この「MLA連携の事例を探す」をテーマにレポートとプレゼンテーションを学生に課している。この課題に取り組むプロセスにおいて、周知のLから発して、MとAとをあらためて発見しながら、調べることや対象に近接し迫るための新しい手法と

いうか、ルートを、学生は自ずと発見しているような感触がある。その成果の一端を別表にまとめてみた。

私自身、もう少しまとまった論考として、「調査研究手法としてのMLA連携の視点」というようなものを整理できないものかと、近時、いろいろと思索しているところである。

- (i) 「生田長江」『日本文学史 近代・現代篇 八』（中公文庫 二〇一二）より
- (ii) 谷沢永一『大正期の文藝評論』（中公文庫 一九八九）より
- (iii) 『知の巨人』二〇頁
- (iv) 今東光「幻視の画家関根正二補遺」『繪』（一九七一年六月号）
- (v) 伊東深水「天分豊かな関根君の芸術」『みづゑ』（一九一九年二月号）
- (vi) 藤澤清造「國民座の第五回公演を見物して」『演藝画報』（一九一八年七月号）

**慶應義塾大学 視聴覚教育メディア論・博物館情報メディア論における課題
「MLA 連携の事例を探す」プレゼンテーション題目*
2010-2012 年度**

2010 年度

- 1) 学部 2: 赤瀬川原平の作品と瀧口修造アーカイヴが同一である時の MLA の役割
- 2) 学部 3: 黒田〔清輝〕記念館における作品と施設の MLA ラウンド連携
- 3) 学部 3: 智美術館 智恵子抄 高村光太郎と智恵子 その愛 ―2つの MLA 連携
- 4) 学部 4: ダブリン市立ハーグレン美術館 フランシス・ベーコン・スタジオの事例―アーカイヴ化された画家のアトリエ
- 5) 学部 4: 浜松美術館企画展示「しむら〔志村〕の色」でつながる MLA
- 6) 学部 3: 慶應義塾大学書道会 90 周年事業に見る MLA 連携
- 7) 学部 4: 〔円山〕応挙と『萬誌』の MLA 連携―三井記念美術館の展示を通して
- 8) 院 2: ヴァシリー・カンディンスキー《赤い楕円》(1920) に対する MLA 横断的資料検索の試み

2011 年度

- 1) 学部 2: 郷土資料館から見る MLA 連携
- 2) 学部 2: 『平和』を伝える為の MLA 連携
- 3) 学部 3: 東京藝術大学と岡倉天心の教育活動における MLA 連携
- 4) 学部 3: ギャラリーの MLA 連携の事例―ephemera としての zine を例に
- 5) 学部 4: うらわ美術館に対する提案
- 6) 学部 4: 国立国会図書館電子展示会「描かれた動物・植物 江戸時代の博物史」に見る MLA 連携
- 7) 学部 4: フィリップ・オットー・ルンゲ《朝》を巡る MLA 連携
- 8) 院 1: 〔徳富〕蘆花記念館における MLA 連携について

2012 年度

- 1) 学部 2: オディロン・ルドンから探る MLA 連携
- 2) 学部 2: 東京国立近代美術館フィルムセンターにおける MLA 連携
- 3) 学部 2: 松本竣介と「生きてゐる画家」をめぐって―作家研究における MLA 各領域の資料の活用と連携
- 4) 学部 3: MLA 連携の事例探索―青木繁《海の幸》、蒲原有明『春鳥集』、房州絵入書簡を例に
- 5) 学部 3: 考古学分野における MLA 連携の事例 板橋区立郷土資料館 平成 21 年度秋季特別展示 『貝塚に学ぶ―考古学者・酒詰仲男と地球環境』
- 6) 学部 4: 「鹿鳴館」に対する MLA 連携
- 7) 院 2: MLA 連携の事例―J.M.W. ターナーの作品と P. サンドビーの作品事例

*この科目は後期（半期）に開講され、受講者は主に三田の文学部を中心に学部 2 年から大学院生まで多岐にわたり、通例 80 名程度が受講登録。全員にこの課題のためのレポート（Word 作成）とプレゼンテーションスライド（Powepoint 作成）を課し、選抜された 8 名程度が最終講義日にプレゼンテーションを行う。上記リストは選抜プレゼンテーションの題目および学年を示している。

ラオス 山からだより

ゲオバトゥ村にいいよ電気が通りました。

2012年12月、いつものように村に到着し、いつも泊めてもらっているサイガウばあさんのおうちに入ると、いつものように子どもたちは出迎えに来てくれず、一心にテレビに見入っている後ろ姿が見えました。

「ああ、とうとうこの時が来てしまった」

と、私は運命の時を迎えたような気がしてしまったのです。

電気が通る…村の文明開化？ 喜ぶべきこと…なのですが、テレビ、ビデオ、ゲーム……そしてお金が一番モノを言う消費経済に巻き込まれていく…とうとう、この村にもやってきたか…。案の定、図書館に来る子どもたちも、一時期少なくなりました。みんな、テレビの画面に見入っているのです。子どもだけではなく、大人たちも…。いつもお世話になっているシェンは、すっかり韓国ドラマのモン語版にはまっているし、(難民でアメリカに定住したモンの人

安井清子



たちが多いため、韓国ドラマもインド映画もモン語版のDVDがある。その他、日本の**ライダーのような子供向け番組はタイ語版になっている。婆ちゃん、子ども番組の怪物を見て、「日本にはこんなのが本当にいるのかい？」と聞いてくるし…。

これは仕方がない。世の中の流れだ…と思うつつも、とうとう、テレビやゲームなどと、図

書館が競合しなくてはいけない時が、この村にもやってきたのだ…これからが大変だ…と思うと、やはり気が重くなったのです。でも、少し落ち着けば、きつと子どもたちは戻ってくる…お話をしていれば、きつと戻ってくる…私たちは、それを信じて、ずっと図書館をあげ、来る子どもたちにはお話をしていました。

つい先日、5月始めに行った時には、「たろうの図書館」は再び、賑やかな子どもたちでいっぱいでした。絵本のページをめくる子、本を借りていく子、一生懸命読む中学生、すぐろくをする子、絵を描く子…やっぱり、村の図書館は、子どもたちに必要な場所なんだ…と改めて、思ったのです。

ツイアの結婚



「たろうの図書館」オープン時から、6年間働き続けてくれたツイアが、とうとう結婚し



で辞めることになった。当時19歳で一番若かった彼女も、もう25歳。モンの女性としては、晩婚の域に入り、もう結婚しないのかな…と、彼女には悪いけど、私はかすかな期待を持っていたほどだ。というのは、ツィアは、子どもたちへのお話も、ラオス語通訳的に、モン語で話をし、やることもできたし、図書館の本の大方を読破していただろう、本を探しに来る高校生などにも適切なアドバイスをしていたし、そんなじょそこの司書の資格を持っている人よりもずっとすぐれた図書館員になっていたからだ。

普段はおとなしく控えめだが、きちんと判断し、違うと思ったことははっきりと言った。ツィアの代わりを見つけるのは難しい。だから、彼女には悪いけれど、ツィアには、あまり早く結婚せずに、なるべく長くいてほしかったのだ。

何度か、彼が村を訪ねにきていた。結婚しようか…と思った時もあったみたいだが、「でも、辞めたわ。結婚しなくてもいいわ」と、ツィアは言った。本をあこれ読み、村に住む普通のモンの女性よりは、ずっと広い世界を知っているだろう彼女は、女は結婚したら、家にいて、畑仕事をして、子どもを産み育て、夫につかえて暮らす…というモンの女性の普通の生き方に入るのを、自分でも先延ばしにしているのかもしれないな…という気もしていた。

2月のある日、ツィアはビエンチャンにいた私に電話をかけてきて、「バヌン、早く来ないとお嫁に行っちゃうわよ」と言う。「えー！」と驚くと、彼女は笑って、「うそよ、まだ行かないわ」と言って電話を切ったので、冗談かなあと思っていると、その翌日、図書館のもう一人のスタッフ、トゥルが電話をかけてきて、「ツィアがお嫁に行っちゃった」と言うではないか。モンの人はあつという間に結婚してしまうのである。ツィアはその後電話で、数日後の土曜日に結婚式をするという。「来てくれなかったら、一生うらむわよ」とツィアは言った。そこで私

は、急ぎよ、村に駆け付けたのだった。

モンの結婚は、男が女を自分の家に連れていくことから始まる。ツィアも、会いに来た彼に連れられて、誰にも言わずに、そっと家を出て彼の家へ向かったのだ。その後、親戚が使者として家を訪ね、「お宅のお嬢さんを嫁にもらいました」と言った時、ツィアのお母さんは全然気がつかず、「あら、うちの娘はまだここにいますけど」と言って振り向いたら、いなかった…とのこと。数日後、実家での結婚の儀式に戻ってきたツィアは、家に入ってきたなりお母さんに抱きつくくと、「黙って行ってしまっでごめんなさい」と泣きじゃくった。ツィアは泣いてばかりいた。「結婚とは生家を出ていくことなんだ。ツィアはもうこの家の人間ではなくなってしまうんだ」と、モンの女性にとって、結婚することの重さを感じた。

ツィアは行ってしまった。私にとっても、図書館的一幕が下りてしまったような…そんな感じがしたのだった。これからどうしよう…脱力感の中、ふっと考えた。でも、ツィアがこの図書館で経験して身につけたこと、ツィアが読んだ本から得たもの…これは彼女の力だ。どこに行っても変わらない。

「そうだ。少し落ち着いたら、ツィアに絵本を贈ろう。彼女が、じきに生まれるだろう子どもに…近所の子どもたちにお話をしてあげられ

るように…」

そう思ったら、急に気持ちが明るくなった。ツイアは、きつとツイア文庫を開けるだろう。彼女にはその力がある。そして、図書館は、子どもたちの為だけではなく、関わる女の人たちにとっても新しい経験になり、力となっていくのだ…と改めて感じたのであった。

新しいスタッフ、マイ



新しい図書館のスタッフになったのは、マイ。トゥルと同じく高校2年生まで勉強し、結婚して辞めた元同級生だ。やはり村の青年と結

婚し、今2人の子供のお母さん。最近では、畑仕事の行きかえりなどに、重い荷を背負って、忙しそうで疲れている顔しか見ていなかったが、図書館の仕事の初日、マイは、小ざっぱりとしたブラウスとシン（スカート）をはき、きれいな恰好をして現れた。私はそれを見て、嬉しくなった。毎日毎日、畑仕事に追われていた若いお母さんが、週に数日、自分の子どもを連れて、図書館の仕事をやるのって、きつと悪くないよね…と。

おしゃべりな人ではないが、しつかりと話す。マイは言った。

「私は、小さい子が好きなの。だから、勉強を続けていたら、幼稚園の先生になりたいと思っていたの。でも、結婚して学校辞めてしまったから、ダメだったけど…。畑仕事が忙しいから、その上に図書館は無理かと思ったけど、トゥルに『やってみなきゃ、何も変わらないよ』って言われて、やってみることにしたの。図書館で働くのは好きよ。私も、子どもたちに、上手にお話をしてあげられるようになりたいわ」

いよいよ、コミュニティセンター 建設着工

前々から村の人と約束をしていた、村の集会

所兼小さな文化センターのようにも使える場所…いわばコミュニティセンターのような建物が、やっと2013年1月に着工した。これまで、何度も話し合いを繰り返してきたが、村長が代わったり、あれこれで、なかなか実行に移せなかったのだが、やっと実現することになった。

今回は、私たち文庫基金から、前回の図書館建設で余った材木を全部と、材料費を提供し、村の人たちが大工さんに払う労賃をみんなを集めて出す（一部、足りない部分は文庫基金から少し援助）…ということ、コミュニティセンターの建物を建てることに話が決まった。大工さんは、図書館の建設にもかかわったジュアテンが担当。図書館のすぐ下に住み、一時は図書館のスタッフとしても働いてくれていたリーが、助手としてジュアテンの仕事を手伝った。大勢の労力が必要な作業は、村の人たちが手伝った。

今回は、作業は村の人にお任せ。お金も村長に渡して、材料購入などすべて自分たちでやってもらった。でも、実は村長は自分の商売、副村長の1人は自分の畑仕事でほとんどいない中、自分の仕事と時間を犠牲にして、ほとんどの雑務を担当したのが、副村長の1人のネンワアで、まじめに一生懸命、奔走していた。このような人がいないと、コトは進まないと感じ。今回の建設の功労者だ。

(→奥さんと板を切り出すネンワ)

2013年1月。図書館の隣の敷地に建っていた米倉とトウモロコシ倉を、みんなで移動させた。まずは、中に入っていたトウモロコシを全部運び出し、それから人海戦術で重い倉を運ぶ。そろそろと……でも「人の力ってすごいなあ」と何でも人間の力でやってしまおう、モンの人たちには、いつもびっくりだ。この後、建設予定地がすっかり整地された。



建設途中のコミュニティセンター。出来上がったら、集会所などとして使うとともに、モンの民話や村の写真やビデオなどを置き、見たり聴いたりできる、いわば視聴覚ライブラリー的なスペースを作りたい。また、モンの楽器ケー

ンなどの教室も開きたいとの村の人たちの希望もある。モンの伝統文化保存に役立つことができれば嬉しい。

「たろうの図書館」に並んで、村の人たちが集まる素敵な場所になりますように！



世界ナゼそこに？

日本人に「たろうの図書館」が紹介されます

5月始め、テレビ東京の「世界ナゼそこに？日本人」の取材班が、ラオスを訪れ、安井が取材を受けました。また、ゲオバトゥ村の生活、図書館の様子、図書館ができるようになった経緯なども取材されました。「ラオス山の子ども



文庫基金」を応援してください。皆様には、ぜひご覧いただきたいと存じます。テレビなので、どのように編集されるのか多少不安はありますが、通信では伝えきれない、本をとる子どもたちの声や笑顔、畑で働く人たちのたくましさ…などが、映像を通して、紹介されればいいな…と願っております。

関東ではテレビ東京で、毎週金曜夜8時から1時間放送ですが、全国放送だそうです。(テレビ大阪、テレビ北海道、ミヤギテレビ、北陸放送など…ただ、放送日、曜日は異なるようです) テレビ東京では、5月末放送という話だったのですが、延びたようで、6月中のどこかで放送になると思います。番組表を注意深くご覧になっていて、ぜひご覧くださいれば幸いです。

村の人たちの総力であたらしい建物ができることになりました

みんなで村のことを決め、力を合わせて物事に当たっていくこの村の人達にとっては、みんなが集まれる場所が必要で重要です。この場所は、もともと図書館建設のために村が用意してくれた土地でした。図書館が予定より小さくてすんだので、ここに村のセンター的役割を持つ建物を、というのがずっと村の人達の希望でし

た。ようやく実現できてはっとしています。昨年から電気も通り、これからは利用の幅もいろいろ広げられると思います。図書館員だったツアイさん、新しく図書館の仕事を手伝ってくれることになったマイさん達、新しい建物が女性達に元気を与えられる場になって欲しいです。どこの国でも子どもと女性是一緒です。隣にある図書館とともに、ずっと村の文化活動のかなめの場所として広く利用され、村の人達に役立てられることを願っています。

(武内桂子)

ラオス 山の子ども文庫基金

年会費…一口 2,000円

年数回、活動報告を送付いたします。

どうぞご支援、ご協力よろしく願いたします。

ます。ご関心のある方はどうぞご連絡下さい。

郵便振替の口座…

ラオス山の子ども文庫基金

001600-6-482100

武内桂子

〒982-0212

宮城県仙台市太白区太白1-19-6

022-245-8158

安井清子

〒166-0015

東京都杉並区成田東5-29-21

03-3398-2182

ラオス 山の子ども文庫基金・事務局

〒166-0015

東京都杉並区成田東5-29-21 安井方

TEL&FAX 03-3398-2182

E-mail pajnub@com.home.ne.jp

Homepage [http://www.7a.biglobe.](http://www.7a.biglobe.ne.jp/~laosyamanoko)

[ne.jp/~laosyamanoko](http://www.7a.biglobe.ne.jp/~laosyamanoko)

<http://www.7a.biglobe.ne.jp/~pajnub>

「マイワアよ、やすらかに」

前号(2011年5月)で、引越すために図書館を辞めることになったとお知らせした元スタッフのマイワアが亡くなった。自殺。

夫の実家のある村に、家族で移り住んだマイワアは、トウモロコシをたくさん作って生計をたてようと、農作業に忙しい日々を送っていた。でも、夫が浮気をしたこと、畑仕事が多かったこと、そして体調も崩し、彼女は辛かったらしい。マイワアは、「週3日またゲオバトゥ村に戻って、図書館の仕事をしたい」と夫に言ったところ、「なに言ってるんだ。畑仕事を文句言わずにやれ」と言われたそうである。

本当の原因が何だかはわからないが、とにかく

くマイワアは、夫との畑仕事の途中に、一度どこかへ行き戻つてくると、まだ4歳ほどの息子を抱き、「お母さんが死んだら、お父さんと一緒にいなさいね。でも、お父さんが新しいお母さんをもらつて、おまえに意地悪だったら、お母さんが迎えに来るからね」と言つたそうだ。

息子はいんうんとうなづいた。夫はそれを聴き、「おまえ、なに變な話をしてるんだ？ 子どもにそんなこと言つて」と叱つた。すると、マイワアは、「私は薬を飲んだの」と言つて、ほどなく倒れ息を引き取つたという。山には毒草があるそうで、それを食べると死んでしまううである。彼女が何を食べたのか、わからない。その夜、やつと連絡をもらつたお母さんは、息子夫婦と一緒にバイクで駆けつけた。

「信じられなくて……どうしてもウソだつて思つて行つたの。だつて、前の日には元氣な姿で、私に会いに来たのよ。娘は、『図書館で働きたいけど、旦那が許してくれないから、帰つてこれないわ』つて言つたから、私は娘に『本当に嫌なら、離婚していいからお母さんの元に帰つておいで』つて言つたのよ。でも娘は、『旦那は一人じゃ何もできない人だし、やつぱりいいわ』つて言つたの。で、次の日に死んだなんて、信じられなかった。でも、呼んでも呼んでも起きない。目を覚まさない。それで、ああ死んでしまつたんだつて思つた。遠くにいても、

元氣でいれば帰ってくる、また会えるけれど、死んでしまつたら、もう二度と会えない」と母は泣いた。

マイワアは賢い人だつた。ただ、短氣だつた。だから、きつと、頭に血が上つて、死ぬことしか考えられなくなつた時に、ふつと死んでしまつたのではないか……そう思うと残念でならない。そんな思い込んだりせずに、一歩後ろに下がつてゆっくり考えることができたなら、死なずにすんだのではないか……もし村にいて、お母さんや他の人に愚痴を言つてワァワァ泣いたり、相談することができたなら、死なずにすんだのではないか……人生を自ら断つことはなかつたのに。でも、誰も、彼女を救うことができなかった。

マイワアはなぜ図書館に戻りたかつたのだろう？ マイワアは絵を描くのが大好きだつた。図書館でもたくさん絵を描いていた。マイワアが描き残したモンの民話の挿絵が、私の手元に残っている。

「とても上手だよ。絵本に印刷できたらいいね」と、私は彼女に言つたものの、結局何もしないうちに、彼女は逝つてしまつた。もし、その絵本が印刷できていたら、彼女は自殺しなかつただろうか？ もちろんそんなことは関係ないかもしれない。でも、モンの女性にとつて、自分が表現したり発表したり主張したり……そういうことは、まだまだ少ない。自分が表現した

ものが作品となつて手元にあつたら、それは、自分が生きる意味や力に、少しは繋がつたかもしれない……そんなことを思うと、私は図書館で働いてくれた彼女の「描きたい」という気持ちと力を、もっと応援してあげられなかつたことを、申し訳なく思う。

もちろん、自殺の原因とは関係ないだろう。でも、モンの女性の多くが、元々一夫多妻制の男性中心の社会の中で、忍耐と辛抱を重ねて生きていく。そんな中で、自分の好きなこと、やりたいこと、価値観、夢や希望を持ち始めた女性たちは、きつと、これまでとは違う葛藤の中に投げ込まれるのではないか？

村の中で図書館をやる……ということは、これまでとは違う価値観を外から持ち込むことでもある。民族の伝統や文化の継承に役立つ図書館にしたいと思つているが、ある側面から見たら、これまでの価値観を壊すことに一役買つているともいえる。でも、やつぱり、前回のNHKの朝の連ドラではないが、私は、

「女性たちよ、よき人生を！」という言葉をも、モンの女性たちに、そしてマイワアにかけたかった。

マイワアのご冥福と、残された3人の子どもたちが、少しでも元氣に幸せに、よき人生を過ごせるように育っていくことを祈っています。

後 記

「ふぉーらむ」10号をお送りします。

恒例の夏休み旅行は、出雲大社の60年に1度の遷宮ということもあり、今年は山陰に行ってきました。伊勢神宮の式年遷宮とも重なるというメモリアルな年ということもあり、年配者だけではなく多くの若い人達が訪れていました。

伊勢が常に新たに清浄であるという「常若(とこわか)」、出雲が「蘇(よみがえり)」とそれぞれ式年遷宮には違う意味があるようですが、建物を改めることで新たな力を取り戻し次代に継承していくという点では共通しています。図書館やアーカイブ活動にも通じる精神ではないでしょうか。

「暑さ寒さも彼岸まで」といいますが、昨今は10月に入っても気温が30度を超したり、クールビズの期間も、10月末となってきた、四季の感覚が狂ってきているので、こういう周期性というのは忘れがちな感覚を思い出すのに役立つものだと、先人の知恵を感じました。

「ふぉーらむ」も本号で10回目と節目を迎えました。次の節目を迎えられるよう活動に励んでいきたいと思います。
(岩本)

紅葉が北海道から東北へ下りてきました。北アルプスの3000m峰も今が盛りです。上高地一带の山小屋も10月の連休予約が9月末には終了したとありました。福島事故から2年以上がたち、人々の心にも、明るさを求める余裕が出てきたのでしょうか。

紅葉にうまいもの、これからが盛りです。

今回、図書館サポートフォーラム賞(第2回)を受賞された安井清子様より原稿をいただきました。小さな一歩が、二歩、三歩と歩んでいます。
(森本)

ふぉーらむ 第10号

2013年10月15日発行

発行人 山崎久道

製 作 森本浩介／岩本謙一／齋藤香織

発行所 図書館サポートフォーラム

〒143-8550 東京都大田区大森北1-23-8

日外アソシエーツ(株)内

TEL.03-3763-5241 FAX.03-3764-0845

http://www.nichigai.co.jp/lib_support/index.html

